



令和７年度

東京都立 立川高等学校
SSHアメリカ合衆国海外研修
成果報告書











はじめに

東京都立立川高等学校長
鈴　木　宏　治

本校は明治 34 年（1901 年）に東京府第二中学校として開校し、昭和 25 年に東京都立立川高等学校と改称、以来 124 年の歴史を誇る都内屈指の伝統校です。令和 4 年 4 月には、都立高校で初めて「創造理数科」を新設し、新たな一歩を踏み出しています。

本校は、平成 30 年に文部科学省より「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」第Ⅰ期（平成 30 年度～令和 4 年度）の指定を受け、令和 5 年 4 月には第Ⅱ期（令和 5 年度～9 年度）の指定を賜りました。第Ⅱ期の研究開発課題は『立高から世界へ ～解なき時代にたくましく挑み続ける国際性豊かな科学技術人材の育成～』であり、取組の柱を「課題研究」「国際性の育成」「本物体験」「教科教育」と定めています。普通科及び新設の創造理数科において、文理を問わず全員が課題研究に取り組むとともに、課題発見力・科学的思考力・表現力や国際性を育み、未来の科学技術社会で活躍するグローバル人材の育成を目指すプログラムを開発しています。

アメリカ合衆国での海外研修は、SSH の取組の柱の一つ「国際性の育成」を目的として、現地の大学や最先端研究機関を訪問し、そこで活躍する研究者や学生と交流して視野を広げ、将来国際社会に貢献する科学技術人材の芽を育てるものです。今年は本校2年生25名が参加しました。カルフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)スクリプス海洋研究所やムーアズがんセンター、カルフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA)、カリフォルニア工科大学（Caltech)、南カリフォルニア大学（USC)、カルフォルニアサイエンスセンターの訪問では、専門家の講義を受け、積極的に質問することで生徒自身の視野を広げました。さらに、課題研究の英語発表では多くの専門的助言を頂戴しました。2 年目の取組となる現地高校（キャニオンクレストアカデミー）訪問では授業に参加し、生徒同士の交流を深め、多くの友人を得る機会となりました。加えて、立川高校 OB の米国紫芳会の皆様のご自宅を訪問し、アメリカで活躍する先輩方の話を聞き、貴重な体験を得ることができました。

帰国後の生徒レポートには、「仲間とのコミュニケーションの重要性や互いに助け合い責任を持つことの大切さを実感した」「生きた英語に触れ、教室では学べない表現や文化を肌で感じた」「講義や授業で積極的に発言し、自分の考えを伝える力を高められた」「異なる価値観に触れ視野が広がり、国際的視点の重要性を深く理解した」「貴重な経験を成長の糧とし、今後の学校生活や進路に活かしたい」といった感想が寄せられました。この一週間で得たものは課題研究や英語力の向上にとどまらず、将来に繋がる大きな意識変革であったことが窺えます。

本研修は、※一般財団法人荒井財団（代表 第 10 回卒業生 荒井喜八郎氏）から多大なご支援を賜り、多くの生徒に参加機会を提供できました。また計画段階から実施まで、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）より丁寧な助言と支援を受け、充実した研修となりました。ここに厚く御礼申し上げます。

結びに、参加生徒のみならず研修成果が校内全体に還元され、生徒一人ひとりの個性と能力のさらなる伸長に繋がり、将来の社会を牽引する人材が本校から多数羽ばたくことを期待し、巻頭の挨拶といたします。

※荒井財団は、2020 年に「荒井倶楽部」を創業し、無償で支援オフィスを南青山の場所に立ち上げ、社会起業家同士が集い、働き、交流する取組を活発に行うとともに、社会に寄与してきた経営者や、経験豊富な実業家、様々な分野の専門家たちが、若者達の事業を積極的に後押ししています。

令和7年度 SSHアメリカ合衆国 海外研修
成果報告書



目　次

はじめに
① 目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P2
② 委員長挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P3
③ 研修の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P4
④ 事前研修について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P5～
⑤ 研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P8～
⑥ アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P34～
⑦ 引率教員より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P47
⑧ 写真で振り返る研修の日々・・・・・・・・・・・・・・・・P48～

委員長挨拶

アメリカ海外研修委員長　児　島　　舞

この度は、立川高校アメリカ海外研修にあたり、多大なるご支援をいただきました荒井様ならびに紫芳会の皆さま、日頃より温かくご指導くださった先生方、そして私たちを見守り支えてくださった保護者の皆さまに、心より感謝申し上げます。皆さまのお力添えがあったおかげで、私たちは安心して研修に参加し、無事に全日程を終えることができました。

研修中は、寮やホテルでの集団生活を通じて、仲間との協力やコミュニケーションの大切さを学ぶことができました。毎日の生活や課題に取り組む中で、互いに助け合い、責任をもって行動することの重要性も実感しました。特に、限られた時間の中での団体行動やチームワークの必要性は、普段の学校生活ではなかなか経験できない貴重な学びとなりました。

また、現地でのプログラムでは、生きた英語に触れる機会が多く、教室だけでは学べない表現や文化を肌で感じることができました。講義や授業では、積極的に発言したり質問をしたりして、自分の考えを伝える力を高めることができたと思います。異なる価値観や考え方に触れることで、自分自身の視野を広げるとともに、多角的な思考や積極的に意見を伝える力も養うことができました。

さらに、米国の学校訪問や地域の方々との交流を通して、社会の多様性や生活習慣の違いを改めて実感することができ、国際的な視点で物事を考える力も身につけることができました。この貴重な経験を、私たち一人ひとりの成長につなげるだけでなく、今後の学校生活や将来の進路選択に生かしていきたいと考えております。

最後になりますが、この研修を実現するためにご尽力くださった紫芳会の皆さま、先生方、保護者の皆さま、そして現地で私たちを支えてくださったすべての方々に、改めて深く感謝申し上げます。皆さまのご期待に応えられるよう、今後も学びを続け、成長してまいります。

研修の概要

2025 SSH アメリカ合衆国 海外研修					
	月日(曜)	訪問先等(発着)	現地時刻	実施内容	食事
1	8/17 (日)	成田国際空港発	17:00	航空機【NH006】利用　直行便でロサンゼルスへ	昼：× 夕：○
		ロサンゼルス国際空港 着	11:25	入国審査・税関通過	
		ロサンゼルス国際空港 発	12:30	現地貸切バス利用	
		サンディエゴポート　着	14:30	サンディエゴポートにて特別プレゼン ・エコシティ サンディエゴの見学、リサーチ	
		サンディエゴポート　発	17:00	現地貸切バス利用	
		UCSDドミトリー 着	18:00	ドミトリー入寮　UCSDドミトリー泊	
2	8/18 (月)	ドミトリー 発	8:45	現地貸切バス利用	朝：○ 昼：○ 夕：○
		UCSDスクリプス海洋研究所 着	9:00	スクリプス海洋研究所訪問 ・研究所見学、講義、実習 ・研究者へ向けて研究発表と討議	
		UCSDスクリプス海洋研究所 発	14:30	現地貸切バス利用	
		ラ・ホヤ地区 着	15:30	ラ・ホヤにて海洋生物、海洋学のフィールドワーク	
		ラ・ホヤ地区 発	17:00	現地貸切バス利用	
		ドミトリー 着	17:30	ドミトリー　UCSDドミトリー泊	
3	8/19 (火)	ドミトリー 発	8:30	現地貸切バス	朝：○ 昼：○ 夕：○
		Canyon Crest Academy　着 （San Diego）	9:00	Canyon Crest Academyとの交流 ・現地高校生との交流・討議	
		学校　発	13:00	現地貸切バス利用	
		カリフォルニア大学 サンディエゴ校(UCSD)　着	13:30	UCSDの日本人研究員に向けて個人発表と討議	
		UCSD　発	17:00	徒歩で移動	
		ドミトリー 着	17:15	ドミトリー　UCSDドミトリー泊	
4	8/20 (水)	ドミトリー 発	8:30	現地貸切バス	朝：○ 昼：○ 夕：× 泊：ホリデイ イン ロサンゼルス LAX エアポート空港
		UCSDムーアズがんセンター　着	8:40	UCSDムーアズがんセンター訪問 ・日本人研究員による特別プレゼンと討議	
		UCSDムーアズがんセンター　発	13:10	コスタメサへ移動　現地貸切バス利用	
		米国紫芳会員自宅 着	14:30	立川高校米国紫芳会との交流 ・現地卒業生の講話・交流 ・現地大学生との交流	
		米国紫芳会員自宅 発	17:00	現地貸切バス利用	
		ホテル 着	18:00	ホテル　ホリデイ イン ロサンゼルス LAX エアポート空港　泊	
5	8/21 (木)	ホテル 発	8:30	現地貸切バス利用	朝：○ 昼：○ 夕：○ 泊：ホリデイ イン ロサンゼルス LAX エアポート空港
		カリフォルニア大学 ロサンゼルス校(UCLA) 着	9:30	カリフォルニア大学ロサンゼルス校訪問 ・大学見学、研究者の講話・討議 ・研究者等への個人発表・討議	
		UCLA 発	14:00	現地貸切バス利用	
		グリフィス天文台 着	15:00	グリフィス天文台見学	
		グリフィス天文台 発	17:00	現地貸切バス利用	
		ホテル 着	18:00	ホテル　ホリデイ イン ロサンゼルス LAX エアポート空港　泊	
6	8/22 (金)	ホテル 発	8:30	現地貸切バス利用	朝：○ 昼：○ 夕：○ 泊：ホリデイ イン ロサンゼルス LAX エアポート空港
		カリフォルニア工科大学 着	9:30	カリフォルニア工科大学訪問 ・日本人研究員による特別講義とランチ交流	
		カリフォルニア工科大学 発	13:00	現地貸切バス利用	
		南カリフォルニア大学　着	13:30	南カリフォルニア大学訪問 ・施設、研究室見学　・講義受講、討議	
		南カリフォルニア大学　発	15:30	現地貸切バス利用	
		カリフォルニアサイエンスセンター着	15:45	カリフォルニア・サイエンス・センター見学	
		カリフォルニアサイエンスセンター発	17:00	現地貸切バス利用	
		ホテル 着	17:30	ホテル　ホリデイ イン ロサンゼルス LAX エアポート空港　泊	
7	8/23 (土)	ホテル 発	10:00	現地貸切バス利用	朝：○ 昼：×
		ロサンゼルス国際空港 着	10:30	出国手続き	
		ロサンゼルス国際空港 発	13:10	航空機利用【NH005】直行便で成田国際空港へ　機内泊	
8	8/24 (日)	成田国際空港着	16:30	成田国際空港到着　関税通関後解散	

事前研修について

文責　小野田　倖、児島　舞

アメリカ研修に際して、英語でのコミュニケーション能力を鍛えるため、全11回の事前研修を実施した。

回数	日時	タイトル	実施したこと
No.1	5/14	Level check	英語力を測るためのグループディスカッション
No.2	5/16	English conversation class 1	売店で物を探している場合などの、店員への質問の仕方の授業
No.3	5/28	English conversation class 2	目隠しした先生を風船のもとに声で導く、道案内のゲーム
No.4	5/30	English conversation class 3	バスに乗り合わせた人など指定された状況下に適した挨拶の仕方の授業
No.5	6/5	Progress check	アメリカの食、ダイエット文化の解説
No.6	6/18	Presentation preparing (introduction)	プレゼン準備　スライド作成の手順について（導入部分）の指導
No.7	6/25	Presentation model	先生のプレゼンを聞き、それに対し質問をする
No.8	6/27	Presentation preparation (Method, Results)	プレゼン準備　スライド作成の手順について（方法、結果）の指導
No.9	7/9	Presentation preparation (Consideration, Conclusion)	プレゼン準備　スライド作成の手順について（考察、結論）の指導
No.10	7/17	Presentation Day 1	プレゼン　発表に加え、生徒の質問練習やその応答の練習
No.11	7/18	Presentation Day 2	プレゼン　発表に加え、生徒の質問練習やその応答の練習

毎回の授業の初めにアイスブレイクと称したミニゲームを行い、緊張をほぐすと同時に英語に慣れるよう取り組んだ。例えば、「Scattegories」という、出されたお題に、他の人と被らないようにユニークな回答をするというゲームでは、３人でチームを組み知識を共有しながら勝利を目指した。

最後の２回では自らの探究発表を英語で行った後、ALTの先生方に改善点をあげていただき、徐々に形になっていった。研修の最中に聞こえた知らない語彙や熟語はメモを取って調べ、新たに吸収する姿勢が見られた。はじめこそ緊張でほとんどの人がうまく喋ることができなかったが、回を重ねるごとに皆が積極的に英語を使い発言するようになった。先生からの英語での質問の応答だけでなく、生徒の間での相談や会話も授業中は日本語に逃げることなくすべて英語で行っており以前より格段に英語に慣れている様子だった。

校内英語事前研修概要

Jessica Sparkes / D'Andre Aitala / Amanda Cowan

5/14, Wednesday:

- Testing
  - We split the class into groups and had them talk about various subjects/prompts.
  - We'd change the groups and prompts every few minutes.
  - The purpose of this was to get a better understanding of their current English speaking and listening comprehension level, to group the students for later lessons.

5/16, Friday:

- Introduction & Greetings
  - We discussed what the class will be about, if there were any topics that they were specifically interested in learning about.
  - We practiced introducing ourselves, common greetings, and popular/common topics.
  - The purpose of this was to expose them to more English and how to introduce themselves.

5/28, Wednesday:

- Food & Culture
  - We discussed various types of food they might encounter abroad, and how to tip
  - We talked about how to order, and how to make special requests on orders
  - We practiced ordering food from each other and the vocabulary that is commonly used
  - The purpose of this lesson was to expose them to foods they were unaccustomed to and practice how to order food.

5/30, Friday:

- Directions and Slang
  - We discussed popular food, clothing, arts and people in America and Thailand to learn more about the culture they might experience while they are abroad
  - We discussed directional language and practiced giving directions to each other
  - The purpose of this lesson was to learn about pop culture they might experience abroad and ensure they can follow directions if they get lost

6/5 Thursday

- Safety and Listening Practice
  - We began the class with a game to practice communicating to each other in English.
  - We discussed safety when abroad, ensuring they knew proper phone numbers and precautionary measures,
  - The purpose of this lesson was to make them aware of any problems they might face while abroad

6/18, Wednesday:

- Presentation Practice
  - We started off by introducing ourselves to each other to practice introductions and get to know each other better
  - We discussed PowerPoint presentations and what makes a good presentation
  - The students talked in pairs and small groups what their presentation will be about
  - The purpose of this lesson was to increase their comfortability presenting in English

6/25, Wednesday:

- Presentations
  - We discussed our presentations, and the most important information to include
  - Students had some time to work on their presentations before doing a practice presentation
  - The purpose of this lesson was to identify the important information to include in their PowerPoints and get comfortable giving presentations in English

6/27, Friday:

- Speech Practice
  - We discussed what makes a good speech including eye contact, gesture, and clear voice
  - Students split up into groups of 4, and were each given a topic to prepare a 1-minute speech on, such as best subject at school, best season or best color
  - Students gave their speech focusing on the ideas that we talked about
  - The purpose of this lesson was to identify how to give a good speech and to get comfortable giving speeches in English

7/9, Wednesday:

- Group Presentations with students who participated in the program last year
  - We invited the students who participated in the program last year to get advice for their presentations
  - Students all gave their presentations and received comments and feedback
  - The purpose of this lesson was to watch presentations in English, ask questions and receive feedback about their topics

7/17, Thursday and 7/18 Friday:

- Presentations
  - Students give a presentation on their own research in English
  - The purpose of this lesson was to confirm the presentation tips and enhance their slides by getting advice from others





研 修 報 告

1. San Diego エコタウン

文責　山﨑　玲、武田　義弘

（1）概要

サンディエゴで行われるエコシステムは、NPO 法人「Cleantech San Diego」が主導している。この団体は 2007 年に設立され、130 を超える企業、大学、政府、非営利団体が出資している。また、同市の具体的な気候変動対応策である CAP(Climate Action Plan)では、６つの目標を挙げており、建築物の脱炭素化、再生可能エネルギー、モビリティと土地利用、サーキュラーコミュニティーをクリーンコミュニティ、インフラと生体系、新たな気候変動対策である。これらの目標を達成するため、市内には環境に配慮した様々な設備や施設がある。

（2）研修内容

大きな目的はサンディエゴのダウンタウンのエコシステムを探ることだったが、現地の UCSD (United of California, San Diego) の学生たちが案内してくださり、彼らとの交流も目的の１つだった。立川高校の生徒は５つのグループに分かれ、それぞれに UCSD の生徒が１人ついて街を散策した。その際、８つミッションが課され、ミッションを一番多く達成した班が景品をもらえた。ミッションを達成するためには、指定された場所の写真を撮るほかに、集合写真を撮ることでも達成することができ、楽しくミッションをこなすことができた。ミッションの内容は、「3 種類のごみ箱を見つける」「サンディエゴ・トロリー駅を発見する」、「現代的に利用された歴史的建造物を見つける」など、エコシステムのヒントになるものやダウンタウンの特徴を見つけるものなど、ジャンルも様々だった。また、現地学生も知らないものもあったので一緒に考えながら探索したり、アメリカや日本の話をしたりと交流も充実したものだった。

・エコシステムの探索

町のエコシステムは大きく２種類あり、１点目が環境保護、２点目が生物保護だった。


リサイクルボックス

環境保護の面ではソーラーシステムや光センサーを用いた街灯や、ごみを種類ごとに捨てるためのごみ箱があった。街のごみ箱は日本のように１つのスポットに処理別に様々なごみ箱を置くのではなく、交差点の角に紙などの燃やすごみを入れる大きな箱があり、広場など人の多く集まるところではリサイクルボックスや燃やすものなどが置いてあり、日本のごみ箱の配置とは少し異なっていた。また、種類に関わらず、バケツ型や箱型のごみ箱があり、共通して日本のものよりとても大きかった。建物自体も環境に配慮されており、屋根にソーラーパネルが設置されていたり、街の環境を調べるセンターや、道端に電気自動車の充電器があり、路上に駐車しながらも充電できる設備もあった。生体保護の面では、海の生態系を守るために、魚釣りや海水浴を禁止するように警告する案内があった。

ダウンタウンの特徴としては、パブリックアートと呼ばれる芸術作品があり、建物にアスリートの似顔絵や抽象的な絵画を描いたり、広場には立体的な像やオブジェクトを設置していた。また、古い建物の１階がセブンイレブンのようなコンビニや雑貨に利用されていた。



・シーポート探索

エコタウン探索の後、私たちはシーポート・ヴィレッジに集合し、各班自由に行動した。そこで現地学生と一緒にアメリカの商店に売られているものを実際に見ることができ、現地学生がおすすめしてくれた商品を実際にお土産として買ったり、地元で有名なお店も紹介してもらったりした。物価は日本よりも高く、1.5倍ほどの値段がした。商品はあまり日本で見ない形のキーホルダーやマグネットがたくさんあり、種類も豊富だった。レストランもいくつかあり、アメリカのホットドッグやアイスクリームを販売する店があった。シーポートの周りには海岸線に沿って屋台を営んでいる人や路上ライブをする人、それらを見物する観光客などがたくさんいた。屋台は食べ物を売っているものは少なく、服や帽子を売っている店、アクセサリーを売っている店など、観光客を狙った店が多かった。日本の屋台で会計するときは現金だが、現地ではカードが主な会計方法になっており、現金が入った箱は壁に備え付けのカギがかかったもので、盗まれないよう対策が厳重だった。

（3）まとめ



エコタウン探索では、ミッションを通して日本とアメリカの違いを実際に目で見て、ごみ箱の配置の仕方や電気自動車の充電ステーションの数の多さに気づき、現地の環境意識の差が日本よりはるかに高いとわかった。歴史的建造物の再活用などでは、現代的なコンビニなどの小売店が入りつつも、街の雰囲気を壊さないデザインに仕上げており、環境と見栄えの両方に配慮が行き届いていて、感嘆した。しかし日本で同じことをやるのは難しいと思った。日本の発電方法は火力発電の割合が圧倒的に高く、仮に電気自動車が普及したところで結局二酸化炭素を排出していることには変わりはない。アメリカのような広大な土地を持っている国は再生可能エネルギーの発電施設を大量に設置したり、超大容量バッテリーを使うこともできるだろうが、残念なことに日本は島国で国土もそれほど広くないので、別な方法で再生可能エネルギーの割合を増やす必要があるとひしひしと感じた。エコタウン探索を通して、持続可能な都市づくりのあり方を考えるきっかけになり、日本で実用的なエコシステムを作るにはどうすればいいのかということを考えるべきだと感じた。

シーポート探索では、キャッシュレス決済が１番印象的だった。キーホルダー屋やアクセサリーといった小物を売る屋台までもカードを主な会計方法としており、日本の屋台ではまず見られない光景だった。特に便利だと感じたのは、カードだと換金をしなくてもそのままどこでも使えることだ。経済の電子化が進む中でいまだに現金を使い続けることについて、メリット・デメリットを挙げて考え直す時間も必要だと思った。

2. スクリプス海洋研究所
Scripps Institution of Oceanography

文責　糸櫻　詠、滝澤　美貴

（1）概要

カルフォルニア州サンディエゴ市のラ・ホヤに位置する。1903 年に生物学者ウィリアム・エマーソン・リッターと、新聞業で成功したスクリプス家の支援により設立された。1912 年にはカルフォルニア大学に編入され、海洋学や地球環境に関する研究の最前線を担っている。研究分野は主に生物学や地球科学、海洋・大気科学である。

（2）研修内容

訪問日　8 月 18 日（月）



まず、スクリプス海洋研究所の研究員である Anya Stajner 氏に、普段は関係者以外立ち入り禁止の桟橋を今回特別に見学させていただいた。長さは約 1000ft（約 300m）もある巨大な桟橋である（右の写真）。

Stajner 氏に説明していただいた、科学者がこの桟橋を使用する目的は以下の 5 つだ。

①　海水を手に入れるため。

水族館や生き物の飼育などのために海水の採取が必要とされている。桟橋の手すりの内側のタイルをはがすと、巻き上げた海水を流す用水路が見えた。海水とともにタコなどの海洋生物が一緒に流れ込んでくることがあり、用水路から海洋生物を採取して海洋生物研究にも利用している。桟橋を歩き進めると、海水を巻き上げている装置があった。近くで観察すると、ここにも海藻などがへばりついていることが確認できた。

↓海水を流す用水路



↓海水を巻き上げている装置↓





②　科学実験設備を設置し、サンプリングするため。

③　多くの小型ボートの停留所とするため。

近くの深い海底には大きな谷があり、大型動物と小型動物とが海中に多く生息しているため観察に適しており、多様な実験に対応できるよう色々なタイプのボートが集まる。

④　ダイバーが利用するため。

人々が海に潜水する理由は、海中の実験設備の状態を確認するためなどとさまざまである。桟橋の奥にはダイバーが海に行くための階段が設置されている。

⑤　人々がコミュニケーションをするため。

この桟橋は研究者やダイバーたちにとって、互いの研究や近況を共有するコミュニティの一つである。

次に、砂浜で実際に歩きながら砂や岩、海水、流れ着いた海藻を観察したり触れてみたりして、ビーチサイエンスについて学んだ。研究所の隣にあるラ・ホヤの海は非常に透明度が高い海水で満ちており、海洋保護区であるため、海から回収して水族館へ運んだ海水はパイプを通して砂浜に還元されており、海には何も加えず汚染しないようにしている。

右は砂浜近くの崖肌の写真である。崖肌に注目すると、表面が滑らかでややカーブがかった石が表面に多く表れており、その石のほとんどは、砂岩や貝殻である。下に積まれている大きな岩々は、山を守るためにサンディエゴ市外から運ばれてきたものである。





最後に、研究所内の教室で、Stajner 氏が研究しているプランクトン、特に動物プランクトンの一種のシー・バタフライについて講義をしていただいた。シー・バタフライは炭酸カルシウムでできた殻を持ち、海洋中の二酸化炭素濃度などの変化の影響を受けやすいため、海洋の変化を読み取ることができる。講義では、船上での研究の様子を動画で見せていただいたり、研究の経緯、方法について詳しく教えていただいたりした。

（3）まとめ

研究所見学で最も印象に残ったのは、プランクトンについての講義である。海洋は二酸化炭素濃度の変化や化学変化などでそれ自身が変化していくが、そのような大きな変化を小さな生物であるプランクトンに着目することで海洋の変化のつながりに気が付くことができる、という考察はこれまで触れたことがなく、新鮮で興味深いと感じた。また、研究動機について説明を受けて、探究心を高めるためには些細なことに対しても「なぜそうなるのか」という問いを持ち続けることの重要性を実感した。Stajner 氏は頻繁に船に乗り海に出ながら実験を行うそうで、研究所が海に面していることや桟橋がある影響で船上での研究をしやすいことなどから、この研究所が海洋学において最前線を走る所以を感じることができた。桟橋には研究員の方々の実験装置が仕切りもなくそのまま設置されており、互いの研究をオープンに共有しあっていることがうかがえ、日本のやや閉鎖的な研究環境との違いを感じることができたとともに、アメリカの研究文化の一端を感じることができ、将来アメリカで研究者として働くということに対しての興味をかき立てられた。

3. ラ･ホヤ地区

文責　伊佐山　知佳、根本　美優

（1）概要



カリフォルニア州のサンディエゴ市にある、美しい海岸線と丘陵地帯が特徴の高級リゾート地。ラ・ホヤ地区にはスクリプス海洋研究所やバーチ水族館、野生の動物が見られるスポットがある。

（2）研修内容

研修日：2025 年 8 月 18 日（月）



スクリプス海洋研究所からバスでラ・ホヤ・コーブまで移動し、海辺や海の目の前にある原っぱを各々散策し、昼食を食べ、1 時間半程度滞在した。ラ・ホヤ・コーブの砂浜ではサーフィンや日光浴のために来た人はもちろん、砂浜の岩場に集まるアシカやアザラシを見るために集まっている人が多くみられた。アシカやアザラシが集まっている岩場では、アザラシやアシカを至近距離で見ることができ、どのような鳴き声で, 浅瀬ではどのような行動をし、どのような見た目をしているのか、よく観察することができた。怪我を負わせられる危険性や、彼らを傷つける可能性があったため、アシカやアザラシに触ることが禁止されていた。



水族館やインターネットで見るのとは違い、野生のアザラシやアシカの実際の様子を、間近で見ることができるので、自然体の生き生きとした動きや鳴き声、生息地帯の様子やにおい等、より幅広い大量の情報を得ることができた。実際にアシカやアザラシを見てみて、想像していたよりも個体間で体をこすりあい、じゃれあう光景が多くみられ、たくさん鳴いていたことが分かった。また、原因はわからなかったが、アザラシやアシカがいる砂浜の近辺では少し臭い匂いがした。そして事前研修でラ・ホヤ地区について調べていた時の想像よりも、アザラシやアシカの生息している岩場の大きさが小さく、アシカやアザラシを見に来る人達が多かったため、インターネットで見るような、アシカやアザラシが浜辺まできて、寝そべっている、という状況を見ることはできなかった。



各々砂浜を散策した後、各自先生の目の届く範囲で自由に昼食をとった。2 日目の昼食はベトナムの細長いサンドイッチだった。注意して食べないと、食べている間にどんどん具材を落としてしまい、カモメが集まってきてしまった。原っぱ周辺にはカモメをはじめとする多くの鳥が飛んでいて、立高生の一部は自分の昼ごはんが食べられたり、お菓子の袋ごとカモメに奪われたりするなど、鳥の被害を受けていた。

（3）まとめ

今回のラ・ホヤ・コーブでの観察を通じて、事前研修では知りえなかった現地の様子や、人間が動物に与えている深刻な影響について肌で感じることができた。特に、アシカやアザラシを間近で観察することで、体をこすってじゃれ合ったり鳴き声を上げたりする様子がよく分かった。これは彼らなりの社会的なコミュニケーションの一端だと考えられる。単に同じ場所にいてそれぞれで生活するのではなく、群をなして互いに関係を持ちながら生活している自然体の様子から、アシカやアザラシの社会性を読み取ることができた。しかも、現地に行かないと中々知りえない臭いや実際の動きを観察することで、インターネットで得られる情報は「写真や映像の中の美しい風景」とは必ずしも一致するわけではなく、美しい部分もそうでない部分も自然の中の一部であると再確認させられた。



また、海岸の地形についても観察から、海岸線が複雑でラ・ホヤ・コーブは入り江のような構造になっており、波が穏やかで海流に流されにくいことからアシカなどの動物が休む場所として利用しやすくなっていることが分かった。また、カルフォルニア近海には寒流が流れており動物たちにとって過ごしやすい海水温であることや、入り江のような場所は天敵となるシャチや大型のサメが入りづらいことも要因だと考えられる。右の看板には海にいる生物の種類やその説明書きが写真とともに示されていた。禁止事項についても赤い字で目立つように書かれており一目で見てわかるようになっている。

ラ・ホヤ地区にはスクリプス海洋研究所や UCSD があるためか、ビーチにある警告の看板がしつこいと感じるほどに多いと感じた。そのことから、こうした研究施設や大学が地域に根付いていることはただ単に学術的な発展を支えるだけではなく、自然環境の保全に対して動物の様子を監視して人間の安心安全を守ったり、その逆で、人間の行動を制限して野生動物の保護を行ったりする側面もあることが考察できた。しかし、観光客が多い場所なので看板で警告されていても触ろうとしてしまう人がいたり、海に入って手の届く距離まで近づく人が目立った。看板の多言語化が進んでいても守らない観光客がいると、さらに規制が厳しくなったり、野生動物が海岸から住処を移してしまったりするので、観光客は自分の国の代表という自覚を持ち、節度ある振る舞いをすることが重要だと思った。

また、カモメなどの鳥類に対して人間が与えてしまった影響も印象的だった。観光客の昼食に群がるカモメの行動は人間に順応し、さらには依存してしまう姿を象徴していた。アザラシやアシカを見に来る観光客がそれ以外の動物にも影響を与えてしまい、生態系を作り変えた一例だと思う。悪気がなくてもそうした観光地ならではの問題が起きていることを広く周知するべきだと考えた。

4. ムーアズがんセンター
Center for Novel Therapeutics（CNT）

文責　梶原　諒太、久保　凛花

（1）概要



カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）に属するがん専門の医療機関。外来診療の他、臨床試験、研究施設などの機関が集約されており、南カリフォルニア地域唯一のアメリカ国立がん研究所（ＮＣＩ）総合指定がんセンターである。

・教授の研究

林公子（はやしよしこ）先生は、現在 UCSD で免疫やワクチンに関する研究に取り組んでいる。また、Science and Innovation for Next Generation (SING)の代表として、未来の科学者を育成する事業も行っている。

（2）研修内容

・特別講義

ラボツアーの前に、林先生からご講演いただいた。カリフォルニア州やサンディエゴ地域の概要や歴史から UCSD や施設の研究の様子、林先生の研究までサンディエゴと日本を比較しながら説明していただき、日本の何倍もある大学施設の規模や研究者、臨床、一般企業と分野を超えた協力で行う研究について学んだ。また、アメリカ合衆国では、大学が都市の中心として機能し施設がつくられているとご説明を受け、技術開発が盛んな理由についても知ることができた。講義内では SING に所属されている黒須さんからは、現地での生活や将来の進路に関するアドバイスを実体験を交えながら説明していただいた。

・ラボツアー

CNT で研究をされている小檜山（こびやま）先生案内のもと研究室を見学させていただいた。研究室内はたくさんの薬品、機械が並んでおり、厳重に管理されていた一方、仕切りなどは少なくガラス張りになっており、開けた印象だった。実験を行う機械は画面とつながっており、データが視覚的にわかるようになっていた。機械は基本的に共用となっており、いつでも、研究者なら誰でも使うことができる。

加えて CNT 内には、研究者の方が体を動かせるようなトレーニングジムや、すぐディスカッションが行える予約不要の会議室があり、研究に集中できる環境づくりの工夫が随所に見られた。施設入口のエントランスでは、天井がガラス張りになっていて、採光がよく、照明が少なくて済むような設計となっていた。また、CNT の施設は環境性能の高い建物を評価する LEED（Leadership In Energy And Environmental Design）の認証を受けていて、環境にも配慮した建物になっていた。





トレーニングジムと施設内の様子。（筆者撮影）

・質疑応答（グループディスカッション）

講師：　林先生、小檜山先生、馬場先生、黒須さん、フェルナンドさん（UCSD 研究者）



研究者の方とディスカッションを行った。主に生徒が講師の方に質問する形で行われ、サンディエゴに来たきっかけ、将来の進路についてなどの質問に答えていただいた。その中で今後の生活で大切にしてほしいメッセージ、アドバイス等をいただいた。（右写真：筆者撮影）

（3）まとめ

今回の CNT 訪問を通して、がん細胞に立ち向かう研究への熱意を強く感じた。特別講義では、林先生の「アメリカはコラボが多い」という言葉が印象的であった。例えば、新型コロナウイルス感染症が流行した際に、ワクチン開発の面でアメリカ合衆国では研究者、臨床、企業が同じ研究室で共同で開発を行うことで迅速に実用化されたという。これに対して日本では、組織ごとに分かれて活動する傾向が強い。技術革新の停滞を防ぐためには、このような慣習を見直し、分野や組織を超えた協力を進めていくことが必要だと感じた。ツアーの際に研究室を案内してくださった小檜山先生は、元々東京大学で研究されていたが、研究していたワクチン研究と、サンディエゴで生活する夢を叶えるために CNT での研究を始めたとお話していた。また、日本のように学生と生徒と区切ることなく、多くの研究員とオープンな実験室で意見交換ができる関係であることが良い点だとお話ししていた。このような実際に生活や研究を経験したからこそ伝えていただける海外での研究の新鮮さを知った。先生の目標が明確になったように、私たちも研究室に触れたことで、研修前には研究職や理系分野に関心を持っていなかった生徒もこのような最先端の現場を実際に訪れたことで、今後の進路や学習への意欲を見直す一歩に繋がった。質疑応答の時間では、研究者・生徒といった違いはなく、様々な人がお互いに尋ね合い、話すといった自由で議論が飛び交う様子に驚きを覚えた。そして、議論の仕方にも特徴があり、否定から入らず「こういうことではないのか」というように自身の意見を交えながら話していて、自由なディスカッションも意見が飛び交っていくことで話の幅が広がり、それが新たな視点が生まれる源になっているのではないかと感じた。日本の方がよかったということについて質問をすると、講師の方から社会保障が充実していることという意見をいただき、現在日本で問題になっている社会保障も日本ならではの特徴であることに気づいた。また、生徒から海外で研究、研究員とのディスカッションをするにあたり、英語力に不安はなかったのかという質問に対して、英語「を」学ぶよりも、英語「で」学ぶことで英語力は上がると教わった。今までは留学や海外で生活する目的として、第一に語学研修を考えていたけれど、英語で何かを学ぶことで必然的に英語力も身につけられることの良さを知り、将来の海外の生活を考える新たな選択肢になった。

5. UCSD カリフォルニア大学サンディエゴ校

文責　森山　恵多、永嶋　理湖

（1）概要

カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)は 1960 年に設立されたアメリカ西海岸を代表する州立研究大学のひとつだ。カリフォルニア大学システムの 10 校のうちのひとつであり、全米でも特に研究レベルの高い大学として知られている。UCSD は、特に科学分野で世界的に評価が高く、数多くのノーベル賞受賞者や国際的な研究者が在籍・卒業している。

所在地：サンディエゴ、カリフォルニア州
設立年：1960 年
学　部：医学部、海洋研究学部、教養学部、工学部、国際研究学部、
　　国際政策・戦略学部、社会科学部、生物科学部

（2）研修内容

・課題研究発表

質疑応答含めそれぞれ１人１０分程度を目安に、研修２日目と４日目に行った。自分たちが取り組んできた探究活動について、英語でパワーポイントを作成し、現地の研究者の前で英語で発表するという貴重な経験をした。発表後には、アメリカ人と日本人研究者から質疑応答があり、自分の考えを素早く明確に伝える力の大切さを実感した。私たちが発表した内容に対して、「なぜそのテーマを選んだのか」「その仮説を立てた理由は何か」「その結果から何が得られたのか、どのように社会に還元していくのか」「その背景にどのような社会的課題があるか」といった本質的な質問が多く、論理的な根拠、構成、社会的意義などを問われ、準備の甘さや論点の弱さを痛感する機会だった。わたしたちの発表には、実験などが残っている未完成な研究も多かった。だが「ここまでやってみた」「今後こうしたい」という姿勢を前向きに評価され、発表の段階で完璧でなくても「次にどう進むか」を明らかに語ることのほうが重要視された。これは、日本の「完成度の高い発表を目指す」という価値観とは異なり、「プロセスの途中でも共有し、対話をしながら進めていく」という探究スタイルを実感できる瞬間だった。また、私たちが日本の状況を前提に発表していた内容に対して、「アメリカでは事情が異なるが、それについてはどう考えるか」といった指摘もあった。同じテーマでも文化や社会的背景によって解釈や課題が変わることを改めて再認識した。このようにアメリカで発表したことによって、単に英語で発表する力だけでなく、対話力や論理力、国際感覚など探求に必要な多方面の力を養った。より質の高い探究活動のために、日本国内だけの活動では得にくい発見やアドバイスが非常に多かった。

・UCSD 内での生活

わたしたちは研修 1 日目から 4 日目まで UCSD のドミトリーで生活した。利用した寮はとても清潔で、設備も整っており、共有スペースでは他の部屋の学生と自然に交流できる環境が整えられていた。施設内は静かで落ち着いており快適だった。しかし、寮ならではの難しさもあった。生活リズムや洗面、シャワー、電気の使い方などちょっとした日常の習慣の違いが、慣れるまでは小さな

ストレスとなった。共同生活では、自分のペースだけで行動せずに相手を尊重し、互いを配慮する姿勢が求められ、他人と空間を共有することの大変さや協調性の重要さ実体験をもって学んだ。また同時に、英語漬けの緊張感のなかで日本人同士で日本語を使い談笑できる空間でもあり安心感を得られる場だった。また滞在中はキャンパス内のカフェテリアで朝食と夕食を計７回とった。基本的には同じメニューが繰り返されており、朝、夜ともにフルーツや揚げ物系が中心だった。野菜も一応用意されていたが、種類や調理法に限りがあり、日本の食事とは大きく異なる、食文化の違いを実感した。食事の際は現地スタッフに英語で注文をして料理を受け取る形式だった。食べたいメニューや希望の量を伝え、実際に英語を使って意思を伝える機会としては非常に実践的だった。



↑寮の部屋



↑カフェテリア

(3) 研修結果

UCSD 滞在では、大学内のドミトリーに３日間宿泊した。そこでは現地の学生と同じ施設を利用し、食堂での食事や共有スペースでの会話を体験した。朝食ではシリアルやフルーツが中心で、日本のような温かいご飯や味噌汁がないことに最初は戸惑ったが、学生たちが気軽に声をかけ合いながら食事をしている様子から、生活の一部にコミュニケーションが組み込まれていると感じた。また、中庭に学生が集まり、バスケットボールなどのスポーツを楽しんでいた。こうした雰囲気を間近に見ることで、勉強と生活が自然につながっている環境の重要さを理解できた。滞在中には、日本人研究員の前で自身の探究活動を英語で発表する機会があった。テーマを伝えるために専門的な語彙をどのように言い換えるかを事前に工夫したが、発表の際に質問を受けると即座に答えられないことがあった。その一方で、研究員から「要点は明確に伝わっている」と評価を受け、内容を正確に伝えるためには語彙の量よりも、論理的に整理して話すことの方が重要であると実感した。この気づきは今後の探究活動において、日本語であっても相手に分かりやすく説明する姿勢につながると考えている。さらに、研究員の方々からは、自分の研究を社会にどう役立てたいのかという質問を受けた。内容そのものよりも「なぜその研究をするのか」という動機を問われたことは、自分の探究に新しい視点を与えた。これからは成果だけでなく、背景や目的を常に意識して発表や記録に取り入れていくつもりである。この三日間を通じて、異なる文化や研究環境の中で学ぶ姿勢を実際に見たこと、英語で発表し双方向のやり取りをしたことが、今後の探究活動の具体的な改善点や目標として生きていくと考える。

6.キャニオンクレストアカデミー
Canyon Crest Academy

文責　上田　絢子、緒方　心、坂田　龍聖

（1）概要

2004 年に設立されたサンディエゴにある公立高等学校。約 2400 人の生徒が通っており授業は 90 分×４コマ。舞台芸術や実用芸術、美術に力をいれており、3 シーズンに分かれて活動する 25 のスポーツチームがある。

（2）研修内容



２コマの授業に実際に参加し、日本語クラスの CCA の生徒と交流した。１コマ目は日本語クラス３の生徒との交流で、アニメ、スポーツ、旅行、などの様々なジャンルごとにグループを作り、そのトピックについて英語で会話した。ビーチバレーを使った爆弾ゲームでは、ボールをパスして音楽が止まった時に持っていた人が、通学方法などの、スライドに出された質問に答えた。



２コマ目では日本語クラス１の生徒と交流を行った。正面に映し出された、立高の写真のスライドを使って、日本の高校生活について説明した。ビンゴ大会も行われ、それぞれのマスに書かれている条件に合う人を探し、出会った人達と短い会話をした。知り合いに有名な俳優がいる、大統領と会ったことがある、などその条件に合う人を見つけるのが困難なものもあった。

現地高校生による学校紹介では、実際に校内の施設を見学した。大きな体育館、ジムがありバスケットコート、テニスコート、ビーチバレーコートなど生徒が利用できる施設が数多くあり、生徒のやりたいことができる環境であった。また、校内のいたるところに CCA の生徒が制作したアート作品が置かれていた。見学中は現地高校生と趣味の話をしたり、学校生活についての疑問を聞くなどして、親睦を深めた。









最後に現地生徒といっしょに昼食を食べ、日本語クラスをとっている生徒だけでなく彼ら彼女らの友達たちとも話す機会があり、趣味やこれからどこに行くのか、日本語を選択していない生徒に日本語を教えるなどして交流し楽しい時間を過ごすことができた。

（3）まとめ

今回交流した生徒たちは日本に興味を持っている人が非常に多く、日本の漫画、アニメの話題で話が盛り上がった。相手が話題を振ってくれるのを待つことなく、自分から積極的に質問することができた。ビーチバレーを使った爆弾ゲームでは、アメリカ、日本両方の学校行事についての質問もあり、それぞれの生徒の暮らしの違いについて知見を広げることができた。ランチタイムでは、現地生徒と一緒に食べていた生徒もおり、同年代の生徒と「生きた英語」で「楽しく」会話することができるようになったと思う。CCA での交流を通して、アメリカの高校では日本の高校と比べて生徒に意見を聞きディスカッションを行わせたり、意見を発表させる機会が多いと感じた。さらに体育の授業では先生が音楽をかけながら生徒といっしょに運動していた。CCA の生徒曰く体育の授業は授業の間にあるリラックスタイムのようなもので、勉強に重点をおいている CCA では先生も生徒たちが根を詰めすぎないように体育の授業で気分をスッキリさせるようにしているとのことだ。このようにアメリカの高校では生徒に選択させ、生徒の個性や興味を伸ばすような教育が行われていると感じることができた。また自分達よりも若い世代の生徒と関わることや、あまり日本について詳しくない生徒と関わることで、日本文化をどう伝えるかなど、より興味を持ってもらうにはどうしたらよいかなどを考える良い機会になった。文法間違いを恐れて話さないよりも、間違えてもよいから自分から積極的に話しかけに行くとよいということを学んだ。また日本人は過去形や言い方を気にして、内容を言う前に口が止まってしまうという人が多く、自分もそうであったのだが今回交流した CCA の生徒がアメリカ人はあまり過去形とかを気にしていない、それよりも内容を伝えるほうがはるかに大事だと教えてくれた。このことから英語を話し始める前に文を色々と考えるのではなくとりあえず、自分が伝えたい事を優先して伝えようとする意識を持ちことができた。また、英語を話し始めるということのハードルが下がり、今まで少し壁を感じていたがその壁をすこし乗り越えることができた。これ以降、アメリカの人と英語で話すことがさらに身近なものと考えることができ、自分の英語の話し方の考え方、マインドなどを大きく変えることができたとても良い経験になったと思う。これは日本にいて ALT の先生などと話すだけでは得られないものだと思う。自分たちと同じような年代の人と腹を割って本当に伝えたいことを直に話し合うことで得られるとても貴重なものだったと考える。







7. University of California, Los Angeles（UCLA）

文責　海野　俊太、井上　陽人

（1）概要

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）は1919年に開学し、現在全米公立大学ランキングでは1位、世界大学ランキングでは13位につける大変評価が高い大学である。その規模も大変大きく、約4万人の学生が在学し、その予算は沖縄県に匹敵する75億円で、ロサンゼルス郡内では連邦政府などに次いで4番目に多く雇用を生み出している。また、インターネットの前身となったARPANET の初の送信実験がこのキャンパス内で行われた。その卒業生には、孫正義やロサンゼルス国際空港のターミナル名にもなっている元ロサンゼルス市長のトム・ブラッドレーがいる。

（2）研修内容

研修日　８月２１日（木）（アメリカ時間）

内容１．講師の方の紹介と質疑応答

２．UCLA の日本人講師の方の前で探究の発表

３．講師の方とカフェテリアで昼食

４．Bookstore で買い物



生徒の研究発表の様子

発表者と発表内容

1.　児島　舞　　日米共通手話の作成
2.　小関　裕康　　ローマの政治体制と支配領域の拡大の関係
3.　伊佐山　知佳　集中力を高める参考書を作る
4.　久保　凛花　　姉妹都市提携の推進に向けた提案
5.　原嶋　春斗　　関節がおかしい原因を探る
6.　梶原　諒太　　日本の市街地における小型風力発電
7.　武田　義弘　　デビュー曲の共通性
8.　小島 にこ　　コンサートのセットリストの傾向とその理由

講師の先生方　・Hokugo Akishige 先生…骨再生、肥満、創傷治癒などの研究者

・Kitaoka Yoshihiro 先生…神経科学の研究者兼技術者

・Moe Ishihara 先生…神経医学の研究者　UCLA の卒業生

現地レポート:UCLA では敷地内の見学と先生の自己紹介から始まり８人の生徒が探究活動の内容を英語で発表し、質疑応答も英語で行った。生徒たちは先生方の質問によどみなく答えられていて、理解できない質問には「You say～？」などと聞き返すことで質問の意図を確認していた。その後の昼食では講師の先生方と昼食をともにし、先生方の研究内容や経歴、UCLA での生活について話を伺った。昼食時では現地の中華レストランである「パンダ・エキスプレス」を利用し、量やおかずの種類などを選ぶことができ、好きなように食べることができた。私はKitaoka 先生と同じ席に座っていたので神経医学の最前線の話や先生の高校生活などについて質問することができた。その後講師の先生方にお礼を言って別れ、Bookstore で買い物をした。


研究者の方との昼食の様子

（3）まとめ

最初に現地の日本人研究者の方々から、自分がどのような学校に通い、最終的に海外進学に至ったのかというお話があった。今回の UCLA の発表者の方々は全員日本の中学、高校に通ったうえで海外大学もしくは大学院に進学していたが、高校卒業後すぐに海外大学に進学した方だけでなく日本で大学を卒業し社会人となってから海外の大学院に進学する方もおり、海外進学には様々なパターンがあることが知れた。また、皆さん全員海外進学する前はずっと日本で暮らしていたという方だったので、海外進学は決して海外に縁がある人だけができるものではなく身近なものなんだなと感じた。日本は島国なので海外を身近に感じる機会が少なく、異文化に身を投じて生活する海外留学という選択肢もなかなかハードルも高い。しかし先述したように、海外留学にも多様な選択肢（これら以外にも交換留学や語学留学）があることをもっと周知させ、また費用面の問題等についても奨学金等の制度をもっと拡充させれば、国際性を持った人材を日本ももっと生み出せるのではないかと感じた。

次に行った 8 人の生徒による探究活動の発表では、私たちは二人とも発表者ではなかったので発表を聞いていただけだったが、印象的だったのは研究者の方々の発表終了後のコメントの部分だ。まず研究発表の良かった点を述べていただいた後、各スライドの不備な点や発表全体を通しての改善点等を伝えていただいたという流れで、この中で私たちに迎合、配慮することなく率直な意見を伝えてくださったのはとても良かったし、ここで発表した 8 人にとってはとても良い経験になっただろうなと思った。日々の探究活動ではこのように指導を受けている先生以外の外部の人からこのように細かく評価をしていただく機会というのはとてもまれなので、私は UCLA ではなく UCSD での発表であったが、ここで研究者の先生方がおっしゃっていたことも生かしつつ自らの課題研究を発展させていこうと思った。

研修中に UCLA の学内を移動する中で、古い中世ヨーロッパ的な建物が多いなと感じた。私たちが訪れたのは伝統的な建物が多く残る北部キャンパスで、ロイス・ホールやパウエル図書館という建物がとくに有名だ。これらの建物は、ロマネスク・リヴァイヴァル建築と呼ばれる 11,12 世紀のロマネスク建築を再興させた建築でちょうど UCLA が開学したころに流行していたものらしく、この大学がいかに歴史ある大学かを肌で感じることができた。



ロイス・ホール



パウエル図書館

8. グリフィス天文台

文責　児島　舞、宇佐美　瑛斗

（1）概要

アメリカ・ロサンゼルスのグリフィスパーク内にある。1935 年にグリフィス・J・グリフィスによって寄付された土地に建てられた人気の観光スポットで、アールデコ調の美しい建物が特徴的だ。2002 年 1 月から工事期間 4 年以上、改修費 9,300 ドル（日本円で約 100 億円）もの改修工事を経て、2006 年 11 月にリニューアルオープンされた。また、標高 345mの山頂に位置しているため、広大なロサンゼルスの街並みやハリウッドサインを一望できる。昼夜を問わず美しい景色を楽しめるほか、天体望遠鏡、宇宙関連の展示がみられる。神秘的な宇宙の魅力にふれられるプラネタリウムのショーも通年開催しており、有料で見ることができる。映画『ターミネーター』や『ラ・ラ・ランド』などのロケ地としても有名である。


日時計


フーコーの振り子


テスラコイル

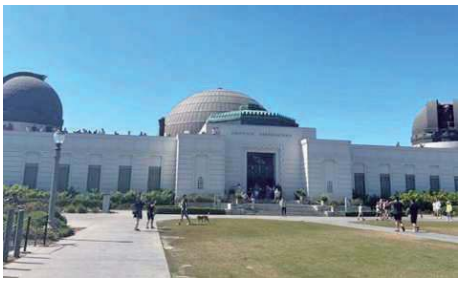

ハリウッドサイン

（2）研修内容

訪問日：August 21st, 2025

天文台内を各自で自由に見学した。太陽系や宇宙の仕組みを解説する展示があり、惑星や星の動きについて学べた。入場料は基本無料であったが、プラネタリウムのショーは有料であり、見ることができなかった。

ここで最初に目にしたのは日時計で、約 6000 年前の古代エジプトで発明されたそうだ。円盤内の棒の影で時刻を読む仕組みで、17 世紀に機械式時計が登場するまで最も精度の高い時計として使われていた。天文台に入ってすぐフーコーの振り子があり、7 分ごとに立ててあるコマが倒れていった。地球の自転が関係しているそうだ。また、ニコラテスラ氏が発明した装置であるテスラコイルがあり、放電ショーを見ることができた。展望台からはロサンゼルスの象徴ともいえるハリウッドサインを眺めることができた。



（3）まとめ

グリフィス天文台を訪れたことで、人類と宇宙との関わりがいかに深く、長いものであるかを実感した。展示では、古代の人々が夜空を観察し、星の動きから暦を作り、航海の針路を決定していたことが紹介されていた。それは人類が生き延び、発展していくための知恵であり、自然との対話のような気がした。そして、人間が空を見上げて「なぜ」と問い続けてきた積み重ねが現代の科学技術につながっていて、人間が自然と向き合いその意味を理解し続けた努力の結晶だと気づかされた。

印象的だったのは、「科学をどう伝えるか」という姿勢が意識された展示だったこと。日本の科学教育では、事実や公式を正確に覚えることが重視されがちなのに対し、ここでは「どうしてそう考えるのか」「その問いがどこから生まれたのか」といった、より根源的な部分に焦点が当てられていた。科学を答えのある学問としてではなく、「問い続けるための営み」として捉えている点に、日本とのアプローチの違いを感じた。

また、すべての解説が英語だったことも大きな学びだった。最初は理解に苦労した部分もあったが、英語で科学的な内容を読む・聞くという経験を通じて、言語の壁を越えたコミュニケーションの大切さを実感した。科学は本質的に国境を持たず、人種や文化、宗教の違いを超えて共有されるべき知識である。そうした国際的な科学の発展には、多様な視点と協力が欠かせず、その共通の土台として英語が大きな役割を果たしていると思った。英語は科学に参加する「手段」で、異なる文化や価値観を持つ人々と協力するための「架け橋」なのだと思う。そしてそれは世界とつながることであり、より広い視野で物事を捉える土台づくりになると感じた。

グリフィス天文台は、科学とは何か、そしてその発展に自分がどのように関わっていけるのかを考えるきっかけを与えてくれた。今後、どのような分野に進むとしても、この経験が自分の中に残り続けることは間違いないと思う。





9. カリフォルニア工科大学(Caltech)

文責　小野田　倖

(1) 概要

カリフォルニア工科大学(Caltech)はLAのパサデナに位置する私立大学。設立は1891年。2024年までで教員、卒業生のノーベル賞受賞者を46人。学部生、大学院(PhD)生はいずれも1000人ほどで、少数先鋭で独創的な学びを追求している。そのため分野の壁が薄く、学問をまたいだ仲間と切磋琢磨できる環境である。

(2) 研修内容

訪問日　8月22日（金）



←
カップケーキと呼ばれる
スペイン風建築

→
講話の様子



①キャンパスツアー

キャンパス内は一面芝生が広がっており、またマツの並木や水路を流れる水は広々とした印象を与えた。野生のコヨーテを警告する看板が見られ、まさに自然と共存した空間といえる。建物は白を基調としたスペイン風のものが多く、カルフォルニアの地中海性の気候と強い日差しがスペインと似通っていたことが由来であると考えられる。しかしながら戦後に完成したCaltech Hallは、その中でも存在感を放つガラス張りの近代風な建物であった。

②特別講話

アメリカの大学受験に際して必要なもの、気を付けておくべきことについてお話をいただいた。アメリカの大学では、生徒の学力だけでなく受験者の人柄やスキルについても大きな評価の対象になる。大学に出願する際には、大きく分けて4つの提出物がある。高校の先生などに書いてもらう推薦状を3枚､ボランティア活動や研究の受賞､部活動の実績などを記入する課外活動のレポート、テストのスコア(SAT や TOEFL)や高校の成績も提出する。また、自らの個性や価値観を大学に伝えるエッセイを書く。Aiharaさん曰く、世界規準で戦える長所を作ること、とにかく行動に起こすことが大切で、そうすることで奨学金や留学制度の支援を受けるリソースを作れるとのこと。日本の大学と同じく受験は情報戦であり、志望大学の応募要項、留学制度はもちろん、奨学金を支援してくれる財団についても事前に細かく調べる必要がある。そのような情報を得て、自らの将来の目標から逆算して徐々にステップを踏むことが大切である。

また、大学院卒業後の進路についても説明があり、アカデミアに進むなら教授、産業に行くなら研究職、ビジネスなら起業をしたり、コンサルに進んだりすることもできる。

③講話をしていただいた大学院生の方の紹介

Aihara さん

小学生の頃参加したロボットコンテストで世界大会へ進出、言語の壁を知り中学から留学しジョンズホプキンス大学卒業後 Caltech に入学。バイオメディカルエンジニアリングを専攻しており、現在は肺がんの生検針の開発など多岐にわたる研究を行っている。

Shiotsu さん

幼いころからいくつもの国に移り住む。日本の SSH の高校に通い、課題探究で行った微生物の活動から発電をする研究が認められる。ハーバード大学卒業後 Caltech に入学、有機化学を研究し、新たな触媒を開発する研究をしている。

(3) まとめ

海外で活躍する日本人研究者には、中学・高校の頃から自分の興味を深く探究する姿勢が共通して見られる。また、幼少期から留学を経験している人も多く、言語の壁を克服しなければアメリカで研究者として活動することは難しいという現実も理解した。

講話の中で印象的だったのは「自分にフィットした大学選びが大事」という言葉である。自分の専攻や研究したいテーマが大学の方針や求める分野とうまく一致しているかどうかが、最初に考えるべき重要なポイントであると感じた。

また、大学院生のお二人の話からは、大学時代に研究所での勤務、キャンパスライフを通じて「本当にやりたいこと」を見つけていく過程が重要であると学んだ。Caltech は合成生物学の分野に強みを持つこと、さらに留学生に寛容であることが、今回のお二人の興味を引いたポイントであった。

私は当初、文系大学を志望していたが、今回の話を聞き、自分には世界に通用するような強みがまだないことに気づいた。そして、私が研究者を目指すなら心理学が適しているのではないかと考えるようになった。日本では心理学は文系に分類されるが、アメリカでは理系として扱われ、立派な研究分野とされているからである。

将来のなりたい姿をまず見据え、そこにたどり着くために今何をすべきかを逆算して考える必要がある。勉強への姿勢や学級活動の取り組みなど、見直すべき点は多いが、さまざまな未来の可能性を閉ざさないように努力を続けていきたい。

10. USC（南カリフォルニア大学）
University of Southern California

（1）概要

ロサンゼルスの中心地に位置し、カリフォルニアで最も古い総合私立大学である。全米屈指の名門校であり、最難関クラスに位置している。多数の著名人や世界トップレベルのアスリートを輩出している。特に、映画芸術学部はジョージ・ルーカス、ロバート・ゼメキス、ロン・ハワード、ブライアン・シンガー、ジョン・カーペンターなどの著名な監督を輩出していることでも有名。

（2）研修内容

訪問日　8月22日（金）　片田さおり教授による特別授業及びキャンパスツアー

片田先生と現地大学生・大学院生（ベトナム、香港、韓国、日本、アメリカ出身）６名との座談会を実施。自己紹介やアメリカでの大学生活等について英語で質疑応答を行った。また、片田先生自らUSCのキャンパスを案内していただき、途中ブックストアではショッピングも楽しんだ。

《片田先生について》

立川高校のOB（34期）である片田先生は、南カリフォルニア大学国際関係学部教授として長年教鞭をとっている。一橋大学を卒業後、ノースカロライナ大学チャペルヒル校政治学博士号を取得。国際連合開発計画メキシコ事務所プログラムオフィサー、世界銀行国際経済部国際金融課研究員を経て現職。著書に、「アジア太平洋のFTA競争」（勁草出版、2010年）や「日本の地経学戦略 ： アジア太平洋の新たな政治経済力学」（日本経済新聞出版、2022年）がある。

（3）参加生徒の感想

・オリンピックに多くの選手を輩出していて、コートも広くて充実した学校生活を送れそうだなと思いました。（上田 絢子）

・広くて設備も整っていて、勉強だけでなくスポーツにも力を入れていると感じました。自分もこんな大学生活を送ってみたいなと思いました。（緒方 心）

・現地の学生との交流を通してどんな教科を勉強しているのか、どのような職につきたいのかなど話し合うことで自分の将来の進路の選択肢の幅を広げることが出来た。また海外大学入試の説明など細かい部分まで話を聞くことが出来て、海外大学へ進学するということも選択肢の１つに入れ、自分の将来への考え方を大きく変えることが出来た。（坂田 龍聖）

・キャンパス内の建物は赤レンガ造りでとても落ち着いた雰囲気だった。また、香港や韓国など多様なバックグラウンドを持った学生から大学院についての話を聞けたのは貴重な機会だった。（宇佐美 瑛斗）

・交流した留学生の方々から今まであまり伺えなかった文系の研究について伺うことができたり、ガイドしてくれた方から安倍晋三氏がUSCに来た話をしていただいたりなどUSCに関することを詳しく伺えたので、自分にとってこの訪問は新鮮で大きな刺激になった。（海野 俊太）

・アメリカの大学や大学院での生活について生きた情報を色々と教えていただき、貴重な時間を過ごすことができて楽しかったです。（唐沢 龍弥）

・実際に学生の話を聞いたことで、リアルな学生生活や学びの雰囲気を肌で感じることができ、海外の大学で学ぶことへの興味がより強くなり、今後の進路や学び方についても視野を広げるきっかけになりました。（永嶋 理湖）

・日本の大学とは違い、ブックストアには大学のグッズが建物の３階まで売られており、オリジナルグッズの量に驚くとともに、大学が自身の認知度の向上および愛校心の高揚を図っているのが伺えた。（原嶋 春斗）

・日本人の大学生の方との交流を通じて、海外での大学生活についてや進路選択に対する考えを知ることができ、自身の将来についても考えるきっかけになりました。（糸櫻 詠）

・医学系から文学系まで幅広い分野を取り扱っている興味深い大学で、実際の学生たちの研究内容や生活の様子を生に教えていただけたのでとても貴重な経験となりました。（滝澤 美貴）
・南カリフォルニア大学を訪問し、広大で整ったキャンパスにとても感銘を受けました。また、学生の活気にあふれた雰囲気が印象的で、多様な学びの場が整っていて、施設の充実度から学習環境の高さを感じることができました。実際に見学することで、アメリカの大学の魅力を実感することができました。（森山 恵多）
・別の学部の学生が共同で勉強するような、開放的な学風に惹かれた。大学内が一つの社会を形成しており、日本人でも参入しやすそうで安心した。（北村 隆樹）
・映画の有名な撮影スポットや著名な監督との関わりも深く、監督の名前が彫られた建物などもあり、理系以外の分野にも力を入れていたことが印象に残っています。（山﨑 玲）
・安倍元首相が訪れたことがあると聞き様々な国から学生も集まっており、国際性豊かな学校だと考えた。（武田 義弘）
・PhD について話を聞くことができて、海外進学により興味を持つことができた。（小関 裕康）
・南カリフォルニア大学のブックストアに、映画で有名な学部があるからか、ディズニーとコラボしたステッカーがたくさんあって驚いた。（伊佐山 知佳）
・日本と各国の国際関係を学んでいる学生さんとの対話を通じて、横田基地をアメリカ本土にいる人も身近に感じていることに驚いた。（根本 美優）
・大学院生の方々に実際の大学院での生活や研究との両立などのお話しを聞くことができ、大学院での生活をより具体的にイメージすることができました。（亀井 明美里）
・キャンパス内に USC のアイテムを身につけている人が多く、愛校心が強いと感じた。（小島 にこ）
・お話を聞いた大学院生の専攻する国際安全保障の分野について興味がわいた。（小野田 倖）
・大学内には、講義室だけでなく、テレビ放送室や会話が楽しめるロビーなど、研究だけでなく文化的な施設も揃っている点に感銘を受けた。（梶原 諒太）
・愛校心の強い学校で、学生同士が国に問わず会話を交わす姿が印象的だった。実際に交流した学生も、異文化を知ろうとする姿勢をもって積極的に質問に答えてくれたので、学校の雰囲気はもちろん、学生それぞれの学ぶことに対しての熱意を知ることができた。（久保 凛花）
・たくさんのコンピュータや頭上にテレビのついているメディアセンターが印象に残りました。メディアについて学ぶ学生がより本物の仕事場にいるような体験ができる環境が魅力的だと思いました。（奥 彩嶺）
・アメリカの大学のイメージそのもので広くて綺麗な建物がたくさんありました。お土産を売っている場所が 3 階建てというスケールの大きさにも圧倒されました。（井上 陽人）
・校内では学祭の最中であり、学校全体で行事を運営するの様子から大学内の強い結束を感じた。（児島 舞）



↑片田先生による特別授業の様子。先生の教え子でもある 6 人の USC の学生たちも参加。



片田先生と参加者全員で集合写真。“ジョージ・ルーカスビルディング”の前で。 →

11. カリフォルニア・サイエンスセンター
California Science Center

文責　小島　にこ、奥　彩嶺

（1）概要

ロサンゼルスに位置する、西岸最大級の科学博物館。トピックごとに様々なブースがあり、体験しながら学びを深めることができる。



図1　サイエンスセンターの外観

（2）研修内容

訪問日　8月22日（金）

サイエンスセンターには6つのブースがあり、各自でグループを作り、1時間にわたって学んだ。

それぞれのブースには体験しながらエネルギーや生体、生物について学べるものが設置されていた。正面の入り口や吹き抜けには航空機が飾られていた（図2）。戦闘機だけでなく、ライト兄弟が作った飛行機や初の個人用飛行機も展示されており、航空機の進化の過程を学べる。近い距離で航空機を観察できるため、機体に書かれた文字やコックピットの内部など細かいところまで見られる。宇宙のブースには、スペースシャトルに乗る体験ができるところ（図4）やオペレーションセンター、機内の説明があり、ロケットの内部の様子（図3）やそれを支える仕組みを知ることができた。またエンデバーがサイエンスセンターに運ばれた時の写真が展示されていた。



図2　航空機の模型



図3　食料保管庫



図4　宇宙飛行シミュレータ

生態系ブースのアイランドゾーンでは鳥の嘴に見立てた器具で箱の中の様々な大きさのボールを引き寄せ、何種類かの形を比べながらどのような嘴の形が餌をつかむのに最適かを考えることができた。また、パチンコのようにボールを飛ばして小さい穴をねらうゲームを通して、島に動物や昆虫が侵入することの困難さを学んだ。生命の世界というブースでは、人間に限らず多様な命への理解を深めた。菌類の説明がある場所では、顕微鏡が設置してあり、キノコの傘の表面に付着している酵母細胞が観察できた。ラフレシアの模型もあった（図5）。ラフレシアは世界最大級の花を持つ植物で、生物間の競争の中で同じ種の子孫を多く残すために多様化していった例を見ることができた。遺伝子の組み合わせによる個体の形質の変化を体感できるところでは、父と母のハトの遺伝子の組み合わせを変化させることで、モニターに映った子のハトの目の色や羽の模様、羽毛の付き方を変化させることができた（図6）。遺伝子が子に与える影響とともに、顕性、潜性による子に残る性質への影響を学べた。また、ヒトの生命の誕生について学べるところもあった。女性の子宮の中で受精卵がどのようにヒトの赤ちゃんの形に成長していくのかを時系列で表す模型が展示されていた。犬のブースでは本当に様々な種類の犬の画像（図7）や模型が設置してあり、初めて見たタイプの犬もいた。模型はリアルで、犬種によっての大きさや

毛並みの特徴を知れた。遺伝子の違いから犬種を見るコーナーでは、たったひとつの塩基が変わるだけで犬と狼の違いが出てきて、犬と狼が種として同じであることを実感できたとともに、塩基配列の重要さを感じられた。また犬の歴史の展示では、人間と生きてきた犬の役割変化を知れた。



図５　ラフレシアの模型


図６　ハトの遺伝子変換


図７　犬種の比較

（3）まとめ

生命の世界というブースでは、植物の花の巨大化などの多様化を学んだ。現在 44,000 種の動植物が絶滅危惧種のレッドリストに登録されており、生態系のバランスが崩れるという観点から生物の保護が課題となっている。だがそれ以前に生物間競争の中での生存の工夫を人間が潰してはいけないのではないかという思いが強くなった。ハトの遺伝子を変えることによる子の形質変化を体験できるところでは、両親の遺伝子の組み合わせを変えると子の形質が大きく変わることに驚いた。遺伝子組み換えの技術も発展してきているが、その技術は子孫に影響を及ぼすものであり、使用については慎重にならなければいけないと感じた。胎児の成長について学ぶエリアでは、受精から 8 から 9 週間の時点での受精卵の模型を見るとヒトの形とわかるような状態で、意外と各器官の形成が早いと思った。人工妊娠中絶のリミットは胎児が外界でも生活できるといわれる満約 21 週だが、早い時期に中絶してもヒトの形はしている胎児の命を奪うと思うと心苦しく感じる。だが中絶もやむおえない場合に女性の権利を守る大切な権利なので、重要なことは軽い気持ちで中絶のリスクを負わないという意識であると思う。犬についてのブースでは、犬と人間の長い歴史のなかで、犬は人間が愛でるためのみならず、逆に人間をサポートし続けてきてくれたことを感じられ、人間はペットを大切にケアするというような義務をもって、一緒に生活していかなくてはならないことを改めて考えさせられた。犬には嗅覚の鋭さや足の速さなど人間よりも優れた特徴も多くあり、決してペットだからという理由で生物として下に見るべきものではないと強く感じた。動物について深く知ることで、動物が虐げられることを防げるのではないかと思った。

今回カリフォルニア・サイエンスセンターに訪問して驚いたのはやはりその規模だった。約 23000㎡の広い場所と 6 つのブースに及ぶ充実した設備は目を見張るもので、これらは州の支援だけでなく、民間の企業などの寄付で成り立っている。日本でも国立博物館がクラウドファンディングを行って話題を呼んだが、このように一般の人でも次世代に残していける施設に高い興味をもち、協力して支えていく意識が増えていけばよいと思う。サイエンスセンターの訪問を通して、科学に対する知識を深めるだけでなく、英文の説明を見ることで英語の知識も向上できた。専門的な内容でも、実際に展示物を見たり体験したりすることで、英語が単語としてというより動作や画像として記憶に残った。体験型の展示が本当に多く、子どもでも楽しめる設計である一方、内容としては大人でも初めて知るようなことが多く、家族で楽しめる場所だと感じた。サイエンスセンターのような施設の充実を図ることで、子どもの興味の幅が広げることができるだけでなく、親も新たな知識を得る機会となり理解が深まると考える。

12. 海外大学・海外大学院に進学するには

文責　北村、唐沢、原嶋

（1）事前学習

日本の高校から直接海外(特にアメリカ)大学に進学するためには、基本的に以下五項目の受験をして合格する必要がある。

1. 成績

   進学には高校での好成績が求められます。一般的にGPA(平均評定)が五段階評価中4以上である必要がある。

2. 英語能力

   英語で行われる講義を十分に理解する必要があるため、留学生は英語理解力を証明できる資料を提出する必要がある。米国のトップ校の場合、TOFLE100点以上・IELTSスコア7.0以上(英検一級相当)程度のスコアが求められる。

3. SATスコア

   米国では、受験者の基礎学力を図るため、出願時に日本の共通テストに当たる「SAT」という試験のスコアを提出する必要がある。

4. 大学別課題

   主にエッセイ(小論文)が課される。制限時間も数か月と非常に長く、自己理解・分析力・表現力等の多面的な力を測ることを目的に課される。

5. 面接

   総合力を問う試験である。数時間にわたり様々な質問がなされ、受験者が大学にふさわしいかを吟味される。

また、海外大学は非常に学費が高いため、留学には奨学金の獲得がほぼ必須である。奨学金は日本の財団や大学自体が提供している。しかし、その獲得には学力の他にもボランティアなどの社会経験や探究活動の実績が必要である。

（2）事後学習

現地で実際に留学した方の話を伺う機会があり、以下のことが新しく分かった。

1. コミュニティカレッジについて

   高校から直接海外大学に進学する以外にも、「コミュニティカレッジ」という進学支援校を通じて進学することが可能である。アカデミックな英語の指導だけでなく、高いGPAの獲得支援も行っている。また、そこに所属することによって学費の減額を行っている大学もある。

2. 併願受験について

   日本の大学受験の併願は多くても2〜3校だが、アメリカでは数十校の大学を同時に受験することが一般的である。学力以外の項目を進学の可否の主な判断材料にしているため、同じ課題で非常に多くの学校を受験し、その中から自分の志望に最も合う学校を選ぶことができる。

3. 面接について

   アメリカの面接は日本のものと異なり、カフェやディスカッションスペースで非常にカジュアルに行われます(図1)。互いのことをより詳しく知ることを目的に行われ、大学が受験者を審査するだけでなく、受験者側も大学との相性を再確認することができます。



図 1:カフェテリア

宿寮の際に使用した UCSD の食堂。
面接もこのような場所で行われる。
日本の面接と違い、リラックスした状態で長時間話すことで人柄を見る。

4. SAT について

立川高校から海外大学に出願する場合、事前に SAT・英語力判定テストを受験しておく必要があります。SAT は Collegeboard というサイトでアカウントを作成することで、日本からでも受験が可能になります。テストは年に四回開催(図 2)されていて、米軍基地内の学校等の会場で受験する。

科目タイプは Reasoning Test と Subject Tests の二つがあり、文系受験者は Reasoning Test のみ、理系受験者は双方を受験することが求められます(図 3)。

この試験は出願までに何度でも受けなおすことが可能であり、どの成績を提出するかは自由に選ぶことができます。

	開催月
第一回	10月
第二回	12月
第三回	3月
第四回	5月

図 2:開図

	科目名	試験内容
理系&文系	Critical Reading	主に読解・要約
	Writing	文法知識・エッセイ
	Math	中学・高校数学
理系	Subjects	専科(高等数学・自然科学等)

図 3:必要科目催月

5. 大学院(PhD)について

大学院に進学したい場合、大学の担当教授に推薦状を書いてもらう必要があります。

また、PhD 進学時は学費は必要なく、場合によっては給与が支給されることもあります。

(3) まとめ

本研修に海外進学した方に詳しく話を伺う機会を頂き、具体的な準備の仕方やコミュニティカレッジのような今まで検討したことがなかった進学方法を教えていただいたことで海外を目指すイメージができた。進学したらどのような生活を送ることになるのかも同時に把握することができた。研修参加者の中には真剣に海外大進学を考えるようになった人もいた。受験まで 1 年以上の余裕がある二学年時に知ることで、進路選択の幅を広げることができた。

(4) 参考文献

・https://jp.amazingtalker.com/blog/jp/english/31059/
「日本で SAT 受験!試験の概要や申し込み方法、試験当日の流れをご紹介します」 2020 年 4 月

・「留学ベストガイド イギリス・オーストラリア・ニュージーランド: 短大・大学・大学院留学」
2003/6/1 第一版発売 JASA 海外進学センター

13. 紫芳会現地学生との交流

文責　小関　裕康、亀井　明美里

（1）概要

場所　ロサンゼルス市郊外 Beth Yamamuro, Satoshi Yamamuro さんのお宅

主催者　Satoshi Yamamuro さんは立川高校の OB で Beth さんは Satoshi さんの奥様で、アメリカに住んでいらっしゃる。

> 山室聡さん（立川高校 31 期）について
> 高校時代に見た映画からアメリカに行こうと思ったそう。卒業後に世界的にビジネスを展開していたキャノンに入社し、アメリカ駐在時に Beth さんと知り合い、結婚。その後アメリカのデジタル地図会社に転職。現在は SSH 活動の一環として毎年夏に立川高校の生徒が山室さんのお宅を訪問させていただいている。

目的　文化の異なる人とのコミュニケーションを通して、文化や価値観の違いを知る。

（2）研修内容

訪問日　8 月 20 日（水）

内容　Beth さん Satoshi さんや Beth さん宅に住んでいる留学生や現地の高校（ Fountain valley high school ）の日本語クラスを取っている生徒とそこの日本語クラスを取っていた大学生の方などとの交流を行った。

当日行なったアクティビティは以下の通り。

①趣味ごとにバディが決まっており、お互いに自己紹介をした。

②A-B-C race　アルファベットの形でできたパスタを使って英単語を作るゲーム。作った英単語の合計の文字数が多かったチームの勝利。ゲームを行った後、全員に景品としてアメリカのお菓子、サンダル、タオル、ノートなどをいただいた。

③Beth さんと高校の日本語クラスで教えている田中先生が用意してくださった材料でサンドイッチづくりを体験した。また、おにぎりやブドウなどのフルーツ、野菜のおひたしをいただいた。

④Making Connections　バディとお互いの趣味や好きなものなど共通点と相違点を探すゲームを行った。

⑤現地の高校生と一緒にプールに入り、水鉄砲のようなものやバレーボールなどをして遊んだ。



A-B-C race



サンドイッチづくり



プールに入って遊んでいる

（3）研修結果

①現地の高校生と趣味や通っている学校の話し、高校でどのような科目を取っているかなどで盛り上がった。
②現地の高校生から知らない英単語を知ることができた。
③アメリカの食文化、日本の食文化の両方を体験することができた。
④アメリカの学校ではよく行うゲーム。趣味や嫌いなことなど相手のことを知ることができた。
⑤現地の高校生もほとんどがプールに入っていたため、バディともバディ以外の人ともより仲良くなった。

現地の学校に通っている留学生や現地の高校の学生、またBethさんの友人の方々などとお話をし、アメリカと日本の文化の違いや価値観の違いについて知ることができた。中でもアメリカのお菓子を頂き、日本のお菓子とは異なり甘いものが多いと知り、食文化の違いを感じることができた。アメリカのパーティーを体験することができ、知り合いや近所の人なども呼んで開催することを知り、とても良い経験となった。日本では何か好きなことをやろうとしても周りを気にしてしまう人が多いが、アメリカでは自分のやりたいことに全力で取り組んでいることを知って驚いた。今回行ったMaking Connectionsのようなお互いの共通点と相違点を探すゲームをアメリカの学校ではよく行っており、相手のことを知るために行うことも日本とは異なることがわかった。

現地の高校生とは英語やたまに日本語も交えて会話をし、自らバディ以外の人にも話しかけたり質問したりすることができた。趣味ごとに現地の高校生のバディを組むようになっており、各々好きな趣味の話を通してより多く会話をすることが、とても楽しい時間を過ごすことができた。サンドイッチづくりはとても楽しく、Bethさんのご友人がおにぎりを用意してくださっており、日本食が恋しくなっていた人にとってすごく嬉しく、またとても美味しかった。

（4）その他

Minglingというバディ以外の様々な人と話すアクティビティをやる予定だったができなかったため、どのように行うものなのかやってみたかった。現地の高校生とはとても仲良くなり連絡を取るようになるまで親しくなった。日本以外の国の友達を作ることができ、とても嬉しかった。

山室様を始め、田中先生やご協力いただいた方、私達のために食べ物やたくさんのお菓子などの準備、ゲームの提供などをしてくださりありがとうございました。とても貴重な経験をすることができました。

Thank you to Mr. and Ms. Yamamuro and all high school students. We could have a great time with you! We want to meet you again.

アンケート結果

１．今回の研修で１番印象に残った場所を１カ所、その理由も含めて教えてください。

UCSDでの滞在や研究員の方の話（1/25）

・研修のメインテーマでもある研究発表をし、実際にUCSDで世界の最先端を走る方から質疑応答をすることができたから。また、アメリカの大学の雰囲気や、食事、気候など、一番長く滞在した場所だったこともあり、自分の中で忘れられない経験になったから。

Caltech（カリフォルニア工科大学）（1/25）

・日本人研究者とのランチで、わたしが将来進みたいと思っている分野の研究者に、アメリカの大学では何を学べるのか、日本の大学との違い、実際研究者になってみてよかったことなど、将来のビジョンを考える上で、とてもためになる情報がたくさん聞けたから。

UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）（1/25）

・自分の探究発表を行った場所がここで、探究発表を聞いてもらった先生の影響で、自分のなりたいものに大きな変化が起きたから。

グリフィス天文台（1/25）

・小さい時から空が好きで、天体についてもっと知れて嬉しかったから。

現地高校（キャニオンクレストアカデミー）での交流（12/25）

・たくさん英語で話せ、自分から声をかけたり新しい友達ができたりして充実していたからです。すごく楽しくて、来て良かったと思う１つの大きなポイントとなっただけでなく、同年代の高校生と話したことで自分の英語力不足を感じて、より英語の勉強を頑張ろうと思うきっかけになりました。
・CCAでの現地高校生との交流が自分の英語でネイティブと話すアメリカでの初めての機会だったため印象に残っています。
・校内の雰囲気がとてもよかった。キャンパスツアーで、生徒同士がフレンドリーに会話しており、昼食も外のベンチなど自由な様子に憧れを持った。ベルがなったらみんなすぐ切り替えて授業に移ったのもとても印象的だった。
・同年代の異なったライフスタイルや価値観を聞き刺激を受けた。一緒にお昼を食べたり、校内を回ってみたり、レクをしたり、連絡先を交換して全体での交流後も個人的に仲を深めることができたりなど滅多に経験できない時間だった。
・初めて自分と同年代や少し下の世代の人達と目を見て電子機器なしで会話したため。沢山の新しい友達が出来たため。
・積極的に話しかければそれだけ多くの学生が自分に向き合ってくれて、たくさん会話を広げられて友達ができたから。
・現地の高校生と交流する機会はここだけでそこでゲームをしたりして交流してアメリカではやっていることだったり日本のことについてたくさん話せたのはとても楽しかった。また昼休みに一緒にご飯を食べたりして意外と自分の英語が伝わるんだなと自信にもなった。
・敷地の大きさ、特に体育館や運動場の広さが印象に残った。また現地の高校生たちと交流する中で、カリキュラムや通学方法など日本と違う点ももちろん多く見つけられたけど、休日の過ごし方や趣味等の話を通じて共通点も多く見つけられ、彼らも同じ高校生なんだということを実感した。また、アジア、アフリカ、ヒスパニックなど様々なルーツを持った生徒さんが多くいて本当にアメリカは多様性の国だなということを実感した。
・現地の高校生の方と一緒に授業を受け、キャンパスツアーとお昼も一緒に食べたからです。３時間ほどの短い時間ではありましたが、たくさん話せてとても良かったです。
・向こうの生徒の価値観を生で体験することができた。自分たちがいかに閉ざされた社会で生きているか

という行かなければわからないことが分かって良かった。勉強についても、アメリカのスタイルを知ることができたので今後生かしていけると思った。
・現地の高校生とがっつり交流してお互いに英語でコミュニケーションをとる機会はとても貴重だったし、自分の拙い英語は伝わらないのではないかという不安が交流を通して払拭され、わかってくれようとしてくれることに自信が持てたから。また、日本の高校との違いを意識して、よりアメリカに対する憧れが強まり、英語学習のモチベーションが上がったから。
・CCAでの交流が一番印象に残っています。その理由は、英語でのコミュニケーションを自分から積極的にしていこうと意識できたからです。

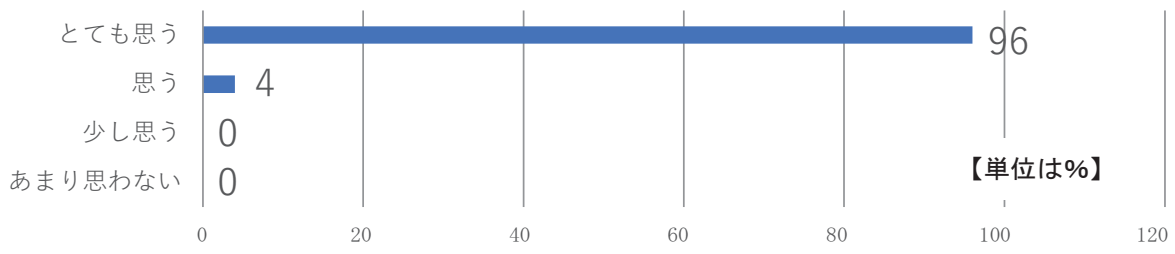
紫芳会ＯＢ宅への訪問（1/25）
・外国人の方と話せて楽しかったから。

ムーアズがんセンター（6/25）
・海外で働く日本人研究者の方にいろいろなことを質問し、学ぶことができた場所だからです。アメリカの大学や研究室の事情だけでなく、先生方の経歴や今後の僕たちに向けたアドバイスまでしていただきました。また、日本ではなかなか研究室や実際に研究している姿を見せてもらえませんがムーアズがんセンターでは写真まで取らせてもらえました。この研修での目標であった海外の研究所について学べただけでなく日本との相違点をも学ぶことができたことは自分にとってとても意味のある事でした。留学という選択肢が僕の中で芽生えだしたのもこの場所でした。
・何人もの日本人研究者にお集まりいただき、それぞれのバックボーンや生き方について学べた。
・現地の研究者の方から、米国の研究施設の方法などを聞いて、日本の環境と異なる点が多々あり、大きな違いを感じ、視野を広げることができたから。
・初めて海外進学について考えることになったから。日本とアメリカの価値観の違いに驚いたから。
・林先生率いるUCSD研究員さんたちの特別講義を行なったところです。もちろん美しい建物の構造にも感嘆しましたが、林先生方のアットホームな雰囲気が印象に残っています。特に質疑応答の時間では、１質問すると莫大な情報量で各先生方が優しく返答してくださり、より留学についての興味が高まりました。先生方の人柄の素晴らしさがとてもよく伝わってきて、本当にこの研修に参加してよかったと思っています。
・私は今まで工学にずっと興味を示していましたが、そこに行って内臓を見るのが苦手な私にも癌を治療するお手伝いができると知って、将来の幅を広げることができたからです。また、アメリカの自由な研究環境や大学のラボ間の強い繋がりをリアルに感じることができたのがよかったと思います。研究者の将来を考えるきっかけにもなりました。

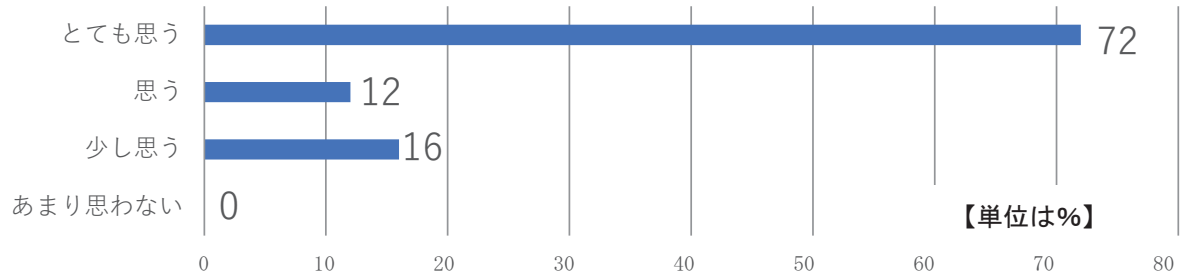
スクリプス海洋研究所（1/25）
・私自身海洋に関することが好きだということもありますが、普段なら絶対に入れないような場所に入れてくれて、海や海の生物についての話を詳しく聞けたからです。

USC（南カリフォルニア大学）（1/25）
・総合大学で個人的に興味のある政経分野にも力を入れていたから。

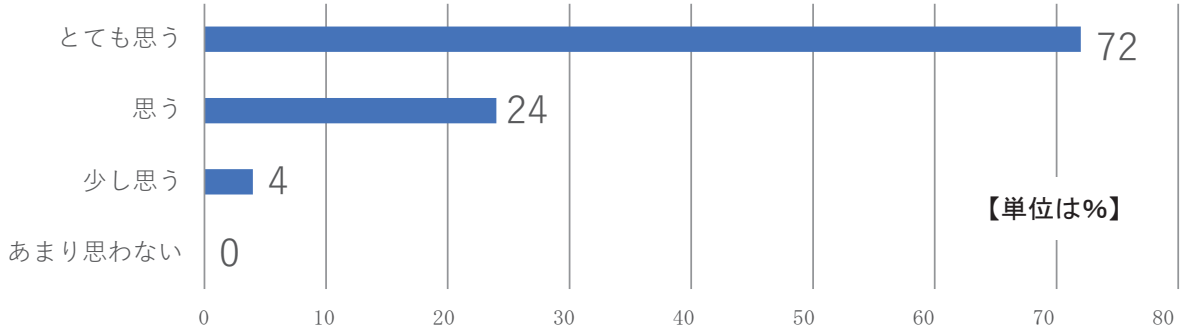
２．今回の研修を通じて国際感覚が高まったと感じますか



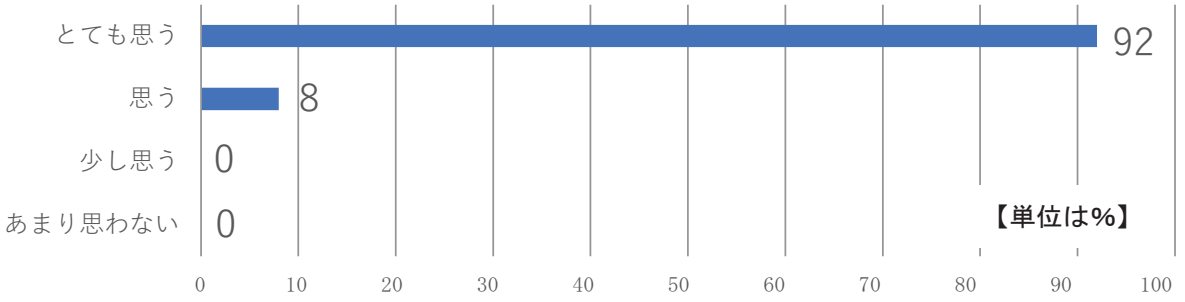
3．今回の研修を通じて英語の運用能力が高まったと感じますか



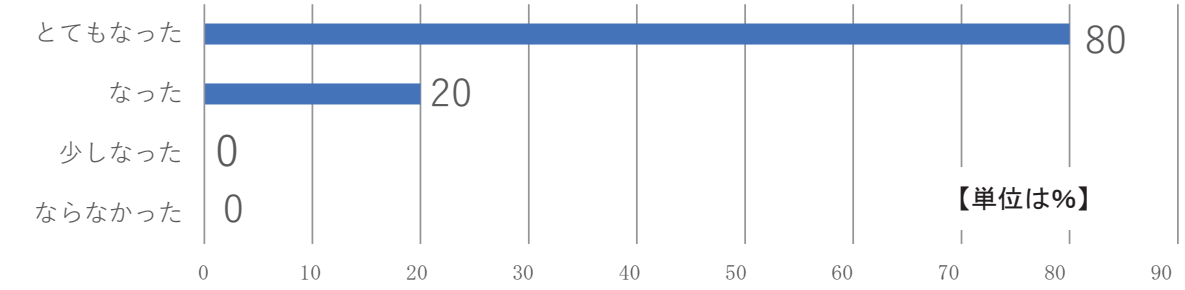
4．今回の研修は自分の課題研究をより良くするうえで役に立ちましたか？



5．今回の研修は自分の将来の進路について考えるうえで役に立ちましたか？



6．今回の研修を通じて、将来、海外で活躍したい（勉強したい・研究したい）と思うようになりましたか？



7．あなたが、今回のアメリカ合衆国海外研修で発見できたこと、成長できたことなど、研修を振り返ってのまとめを200～400字の間で書いてください。

・僕はこの研修の中で特に二つのことを学ぶことができました。一つは日本とアメリカの相違点です。この研修が僕にとって初めての海外渡航だったため、海外はどんな場所なのかとても興味がありました。

実際に七日間アメリカで過ごして思ったのはライフスタイルや感性（例えばトイレでの手の拭き方や研究がオープンなこと）は違えど同じ人間ということです。陽気な人もいればコミュニケーションが取りずらい人もいる。国籍は違えどみんな同じ人間なのだということを現地の高校生や大学生との交流で学びました。もう一つは留学という道についてです。アメリカに行くまで僕の中には留学という選択肢はありませんでしたが海外の大学の良さや日本とは違う研究者としての在り方などひかれる要素がたくさんあり、この研修を通して他言語の人と話すことにも慣れたので、今は留学という道を視野に入れつつあります。この他にもたくさんのことをこの研修を通して学びました。

・研究者の方や大学生のお話を聞ける機会が多く、大学進学や海外で働くことなどの選択肢が広がったので、将来について考えるにあたって今回の経験を役立てたいと思います。またそのお話の中から、人との出会い、自分の興味の新しい発見など将来につながる偶然は、自分が目標に向かって行動しているからこそ出会えるということを学びました。これから私はまず行動し、大胆に思われることにも挑戦していきたいです。そして巡ってきたチャンスを掴めるように、英語力や考え方など自分の足りない力を伸ばす努力を続けようと思います。失敗を失敗とカウントしないことや、自分がマイナーになることに対して貴重な経験だと考えることなどアメリカに生活している人の考え方が衝撃的で、私もそんな前向きでおおらかな考え方ができるように意識していこうと思いました。

・１番感じたことは現地の学生との交流を通じて海外の人とも今の英語力である程度通じたことだ。日本人の研究者の話を聞くと、英語を聞き取れるようになるまで半年かかったとおっしゃっていたが、自分はすでにある程度聞き取れていたので今の自分に自信を持ってもいいと思った。しかし、ちゃんとゆっくり話してもらわないとわからないこともあり、ネイティブの訛りだとわからないこともあったので、もっと英語力を高めていかないといけないとも感じた。課題研究発表では発表自体は練習してきたのでスムーズに出来たが、質疑応答の時に、日本語では言えるのに英語になるとうまく表現できなかった。この経験を今後の英語学習に活かしたいとおもった。

・私がアメリカ研修で発見できたことは主に積極性の大切さです。この研修では多くの日本人研究者の方からお話を聞くことができました。その中で、積極性がなければ人脈も作れず得れるはずのチャンスも逃してしまうということを学びました。私は特に積極性というものが人より足りておらず、さまざまなチャンスを逃してしまったという自覚があったため、この研修を通じて初めて会う人に自分から話しかけて行くという経験は自分の積極性を成長させてくれたと思います。

・今回のアメリカ合衆国海外研修を通じて、さまざまな発見と成長を得ることができました。まず大きな発見は、現地の人々のコミュニケーションの積極性です。授業や交流の場では、自分の意見をはっきり伝える姿勢が当たり前であり、相手の考えも尊重しながら議論が進んでいく様子に大きな刺激を受けました。その中で私は、英語力の不足を恐れずにまずは発言してみることの大切さを学びました。また、異文化の中で生活することで、日本との価値観の違いに気づき、自分の視野を広げることができました。さらに、集団で行動する中でリーダーシップや協調性を意識して行動できたことも成長の一つだと感じています。今回の経験を今後の学習や将来の進路に活かし、より積極的に国際社会に関わっていきたいと考えています。

・正直、研修前は英語話者とコミュニケーションできるかとても不安でした。最初の方は、緊張がとれておらず、研究者の方や高校生との交流で質問しようとしても、ためらってしまって結局声にできないということもしばしばありました。でも、日がたつにつれ、だんだんと英語を話すことにためらいがなくなり、研究者の方や、山室様のお宅で交流した人たちに自分からどんどん質問することができて、会話がとても楽しくなりました！英語を手段として、いろんな人とコミュニケーションをとれるようになったということは、大きな一歩だと思います。また、このような会話の中で、出会った人たちのお話しや、人生観を学んで、アメリカの大学は、日本よりも様々な面で発展していることがわかりしました。将来のビジョンを考えるうえで、海外進学という一つの選択肢が増えたということも、大きな発見だと思います。

・海外研修で特に印象に残ったのは、人との関わりやつながりの大切さです。アメリカで出会った方々は、誰もが互いに助け合い逞しく日々を過ごしています。これこそが今私たちに求められている国際性であ

り、多様な人々と共に生きていくために欠かせないことだと感じました。また、私は将来について漠然と外国語系の学部に進学したいと考えていましたが、今回アメリカでの生活を想定することで、実際に必要な準備や学生時代のうちにやっておくべきことを多く知ることができました。この１週間の経験を通して、残りの高校生活をどのように過ごすべきか、具体的なビジョンを強く持つことができたと思います。

・今回の研修で、印象に残ったのはCCAやYamamuroさん宅の家での現地学生との交流です。最初は自分の英語力で会話できるのか不安でしたが、いざ話してみると意外に会話をすることができました。難しい単語や綺麗な文法にこだわるのではなく、簡単な単語でもいいのでとにかく自分の言いたいことを伝えるという姿勢が重要だと知りました。英語での会話は壁があり、アメリカ研修の最初の頃は自分から話しかけるのが難しかったです。けれども、コミュニケーションを重ねていくうちに自信がつき、会話を楽しむことができました。その自信は、現地の人との会話だけでなく、日本人科学者への質問やミーティングでの発言などにもあらわれたと思います。最初は不安ばかりでしたが、現地の人との交流や課題研究発表を通して、慣れない状況の中で新しいことに挑戦する自信を得ることができました。今後の大学受験や将来に活かしたいと思います。

・母国を離れ異国の地で活躍している日本人の方や日本語を学ぶ同年代の高校生など、いろいろな人に出会い、慣れない環境での生活のなかで数多くの刺激を受けた。海外大学への進学方法やハイレベルな研究の講義をしてくださったり、初めて見るような実験器具ばかりの研究室を案内をしていただいたりとさまざまな知見を得ることができた。カフェテリアやスーパー、空港というように、ひとりでネイティブの方とコミュニケーションをとらなければならないことばかりだったが、あきらめずに積極的に伝えれば、自分の拙い英語力でも理解してもらえることがわかりとてもうれしかった。貴重な機会の連続だったがたくさんの経験ができ充実した研修だった。

・アメリカ研修を通して、異文化の中で生活する大変さと面白さの両方を実感しました。授業などでは、積極的に自分の意見を発言する姿勢が重視されていることがわかり、日本での学び方との違いに驚きました。その中で、間違いを恐れず発言することの大切さを学び、自分も積極的に参加できるようになったことが成長だと感じています。また、現地の学生や研究者と交流する中で、多様な価値観を受け入れる柔軟さが身につきました。さらに、日常生活では言語の壁に苦労しましたが、自分なりに工夫して伝えようと努力することで、相手に理解してもらえたときの喜びを強く感じました。この経験を通じて、自分のコミュニケーション力や挑戦する姿勢が以前よりも確実に高まったと思います。

・アメリカでは多様性を肌で感じることができた。アジアから中東、ヨーロッパなど様々な人が暮らしていて色々な国の言語が飛び交っていた。この研修で初めて会った人に自分から積極的に話しかけることが出来るようになったということが大きな成長点だと思う。初の国外で慣れてないことが多かったが友達と協力して乗り越えることができた。また発表の時に聞き手の目を見ながら発表出来るようになったことも大きな成長点のひとつだ。治安の面から日本で日々安全で安心して暮らせていることは幸せなことなんだなと再認識した。

・今回の研修を通して、日本という国を見つめ直すことができた。安全で技術が発展している日本という印象を日本に持っていたが、現地の研究員の方の話を聞いて、日本が閉鎖的な環境をもっていることを知ることができた。また、今回の研修を通して、外国の方のみならず、日本の関わりのない人とも積極的にかかわれるようになった。その理由としては、現地のほとんどの人々が相手の顔をよく見て、笑顔で話そうとしていたことや、通じなくてもいいから話そうとする努力することを実際に体験で感じたことで、心の中にあった壁のようなものがなくなったように思えたからだ。アメリカ合衆国の印象として、コミュニケーションを通して問題を解決していくという印象を抱いたため、今後は一人で解決していく以外にも、すこし分野の違う人と関わりながら、新しい視点を探していくことで問題を解決していきたいと思う。

・まず感じたのは自分が住んでいる世界はとても狭いものだったのだなということです。アメリカに行くと、そこら中に電動キックボードを使ってる人がいたり、すれ違うだけでみんな挨拶してくれたりと、日本との文化との大きな違いにとても驚きました。この研修を通して私が変化したことは、海外大への

進学が、将来の一つの選択肢になったということです。今まではそんなこと一切考えてこなかったけれど、現地でたくさんの方の経験談を聞くと、自分を成長させるのにこの上ない手段だなと思いました。あえて自分を思うように言葉を伝えられない厳しい環境に置くことで、大きな変化が自分に起こると思います。また、サンディエゴの気候は信じられないくらい快適で、日本のあの暑さから解放されるという点でもいいのかなと思います。今回の研修では数えきれないくらいたくさんのことを学ぶことができ、本当に充実した研修になったと感じています。

・今回のアメリカ研修では、自分の進路やなりたいものについての考え方に大きな変化があったと思う。私はアメリカ研修に行くまで、自分のなりたい仕事が見つかっていないことにすごく焦っていたが、同じアメリカ研修の仲間との会話の中で、大切なのはなりたい仕事を見つけることではなく、やりたいことを見つけることなんだと気づいた。また、現地の方の話を聞く中で、研究者といってももともとも違う仕事をやっていて、より深く知りたいことがあったから、アメリカに来て詳しく調べようと思った人が多く、今までの研究者に対する考え方も変わった。探究発表をした日には自分の探究が理系に近い発表であることを知り、発表を聞いてくれた人の影響で、神経科学のような理系の学問に興味を持ったのも大きな変化だと思う。自分の目標にしていたなんとしても英語で話すことを諦めない、ということも、CCAや紫芳会での交流で達成できたからよかった。

・なんといっても高校２年生の夏にアメリカに行って、しかも世界の最先端を行く大学や研究施設、研究員の方のお話を伺えるという二度とない経験をすることができたのは自分の人生の中で大きな意味があった思う。人々の性格、気候、食事…自分が思ってたアメリカに対するあらゆるイメージは全て覆され、百聞は一見にしかずを肌で感じた。また、日本を出て、世界という土俵で勝負するという目標を持つことができた。まだまだ英語力の不足や、日本人特有の失敗への恐れなどは完全には解消できなかったが、何事にも挑戦してみる、という意味では自分を大きく成長させてくれた思う。本当にこういった機会を用意してくれた全ての人に感謝したい。

・全行程を終了して、自分が思ったより英語が話せたことや英語でコミュニケーションを取る面白さに改めて気付かされた。例え簡単な英語で会話をしたとしても、伝えられて理解し合える喜びを実感することで英会話に対するハードルが下がり、英語に対するモチベーションがすごく上がったし、英検やSSの授業にもっと力を入れたいと強く思うようになった。探究発表では、研究員の方が現地で生活するからこそわかるアドバイスやコメントを頂いたことで、新たな視点に気づき、今後の探究でどんなことを追求するべきかを２学期以降の活動の中で強く考える材料になった。海外旅行では訪れないような研究室や大学訪問を通して、日本とは違う施設や道具の充実さや、学びに対する積極性を間近に見て、留学に対する興味や行きたいと思う気持ちが強くなる貴重な機会だった。

・アメリカは国土が広いだけでなく、人生の選択肢が圧倒的に多い。日本では高校や大学を卒業したら企業に就職する人が大半だが、アメリカでは大学院に進む人や留学する人が多かったり、一度就職した後で大学院に入る人がいたりと進路が多様だった。海外進学に関する話を聞くことができ、自分もチャレンジしたいと考えるようになった。また、現地の研究員の話で行動力や人とのつながりが大切だと分かった。やってみたいと思ったら考えすぎずにとりあえず行動すること、出会った人とのかかわりを大切にすることが大事だと学んだ。また研修を通して自分は積極性が身についたと思う。最初はまだ緊張していたが、三日目のCCAでの交流で積極的にコミュニケーションをとったり、ムアーズがんセンターやCaltech、CSCでは質問したりするなど、研修に慣れてくると自分の成長を感じることができた。

・研修の前までは自分が英語で会話できるのか、プレゼンテーションを英語で出来るのかと不安に思うことがたくさんあった。けれど実際に現地に行ってみると、自分が思っているより会話が通じるということが分かった。そして、たくさんの人と会話をする中で自分の中での外国の人と話すという壁が低くなったように感じた。これは現地に行って経験しないとできないことだと思うので、今回の研修で海外というものへの意識が増した。また自分の研究についても様々な分野の研究者の方々から様々な視点の意見をいただくことができ、今後の研究に生かせることが増えた。

・今回私がこの研修で育むことができたことは、自分自身の国際性と行動力です。研修に参加する前は留学に興味を持ちながらも、なかなかその細部に理解が及ばずただ漠然と「海外」を感じていました。し

かしながら、SKYUSの広大さん、ゆうさんとのお話や現地の若い子たちとの交流などを経て、留学が思ったよりも身近にあることを知り、自分の行動力次第で世界に飛び出せるのだと鮮明に学ぶことが出来ました。また、自分から研究員さんたちに質問しに行ったり、現地の若い子たちに話しかけたり、自分の中では１つの挑戦する部分であった「行動力」をこの研修で大いに育むことができたと感じています。現地では他人と目が合ってほほ笑みかけると、ほほ笑みで返してくれる、そんな日本とはまた違う価値観や国民性を直接感じることができ、日本を出て世界で生きることへの火種が自分の中でできました。本当に、この研修に参加することができて良かったです。

・私はアメリカ研修に行くまでは海外や外国人はどこか遠い存在だったけれど、今回の研修を通して日本とは違う文化に触れたことにより、さらに身近に感じることができるようになった。また、caltechにおいては日本人研究者の方から海外進学にあたっての費用や学校生活、その先のキャリアの話までもお伺いすることができ、これまで視野に入れることのできなかった海外進学について、これも選択肢のうちの一つだなというふうに考えることができるようになったので、とても良い体験だったなと思った。また、CCAでの現地学生との交流などを通して英語をたくさん使う機会をこの研修で得られたことによって、挑戦する気持ちや純粋な英語力もこの研修で得ることができた。この研修で得たことをこの先の大学生活やキャリア形成に活かしていきたい。

・最もアメリカ研修で自分が伸びたと感じたのは、積極性の面です。今まで、私は積極性と言っても限られた枠の範囲でしか考えていませんでした。例えば立高のSSH企画に多く参加することなどです。今回、佐藤さんは私たちの研究発表の後のスピーチで日本人は空気を気にしすぎると仰っており、がんセンターの林先生が運は自分が動かなければついてこないと仰っていました。私はそこで積極性とは、自分が考えていたよりも幅広いものだと気付きました。今まで図々しいと思っていたようなこともアメリカではチャンスを掴むために大切なことであり、日常のことでもあり、より多くその様な行動を起こしていける人ほど成長できることを学びました。そのお話を聞いてからは多くの人にコンタクトをとり、出会いを大切にできたと思います。それまでより周りのネガティブな反応を気にしないで行動を起こしていけるようになりました。

・今回の研修を通してアメリカ研修に参加する前よりも積極的に人と話すことができるようになったと思います。UCLAやCaltechでの研究員の方々とのランチで積極的に一緒に食べるように誘ったり、CCAに行ったときにも現地の高校生と一緒に行動をするように動いたりすることができました。アメリカと日本での文化の違いを自分自身で感じることができました。例えばエレベーターの中で気軽に話しかけられたり、お店でも話かけられたりして日本とは異なりフランクに話しかけてくれるということが分かりました。また、高校生や大学生の方も色々話題を振ってくれたのでたくさん話すことができました。積極的に英語を使うこともできたので良かったです。

・アメリカ留学や進学は自分には不可能だと早とちりしていたが、実際には工夫次第でいくらでもチャンスがあることが分かった。また、そのチャンスをつかみ取るには、無謀だと思っても取り敢えず行動してみるということが非常に重要だと分かった。併せて自分がアメリカの大学に進学出来たらどのような生活を送ることになるのかもイメージできたので、本格的に進学を目指していきたいと思った。自分にとって海外に行くのは初めてだったが、日本の常識が通用しないという経験をすることができてよかった。

・今回の研修で私が得た最も大きな考え方は、「固定型マインドセット・成長型マインドセット」だ。これは、研修に大変協力してくださった佐藤さんから教わったもので、研修だけでなく今後の人生を変えてくれる考え方だと思う。日本にいると失敗が怖くてなかなか挑戦のために一歩踏み出すことができなかったり、ピンチの時にそのピンチをチャンスととらえることができなくて後悔したりすること（固定型マインドセット）があって、どうにかしたいという気持ちがあってもできなかったが、今回の研修でこの部分を少しでも変えるきっかけがつかめた。教わった後にアメリカの人と交流することで、ポジティブにとらえる成長型マインドセットのことがよくわかってきて、自分はこれからどうなりたいのかという指針を定めることができた。研修中はまだ以前の自分が残っていて積極的になれなかったけど、もう一度アメリカに戻ってきたいという夢もできたので、今後は一歩でも半歩でも踏み出してみることを意

識して、日々挑戦を続けたいと思う。
・今回のアメリカ研修を通して、アメリカとの文化や価値観の違いを実際に感じることが出来ました。また、現地の学生との交流では英語でのコミュニケーションをする上で、自分の気持ちを伝えることの大切さを学びました。最初は英語で話すことに不安がありましたが、相手が積極的に聞こうとしてくれて、段々と発言できるようになりました。この研修は、自身の英語力だけでなく、挑戦する気持ちや行動力も身についたと思います。今後は、ここで得られた経験や知識を日常生活や学習に活かしていき、さらに成長していきたいです。

８．来年度以降、海外研修プログラムを作成する上で、継続した方が良いプログラム、修正した方が良いプログラムについて、あなたの意見を自由に書いてください。

・今年行った研究所や大学は必ず行くべきだと思います。行く順番も最良でした。強いて言うなら8/18と8/19の行程は交換しても良いと思う。
・Beth Yamamuroさん宅でのパーティーで現地の高校生とグループになって交流することは、続けた方が良いと思います。共通の趣味を持っているため、最初から会話が弾みやすく、より親しくなれたので、良い経験ができたと思いました。CSCで見て回る時間が少なかったので、もう少し余裕があったらより詳しく見て学べただろうと感じました。
・学生交流では、中学生、高校生、大学生と年代の違う人と話せてよかった。また、研究者も長年アメリカで研究してる方から、大学院生まで幅広い方々の話を聞けてよかった。研修最終日に巡る場所が３つになっていて、時間に余裕がなかったのがよくないと思った。
・特になし。（２名）
・ドミトリーのシャワーの水圧が弱かったところだけちょっと悲しかったです!!でもできればなのであれでも頑張れば大丈夫です!!
・USCのキャンパスツアーのときに、６人の大学生も一緒に同行してくれたら、もっと交流できたのではないかと思った。
・研修旅行ではありながら、適度に観光の時間もとっていただけたのがとても嬉しいです。憧れの地を巡れることが意欲の向上につながると思うので是非これからも同様に組んでいただけたらと思います。
・日本語を話せる高校生や大学生が多かった。英語だけしか話せない人ともう少し関わりたい。
・CCAやOB宅訪問のように現地高校生と交流できるプログラムは継続したほうが良いと思った。
・全てのプログラムを楽しむことができた！理系の人向けだったのでもう少し文系の人向けのプログラムを増やしてもいいと思った。大学の方に直接話を聞くことができたプログラムが特に近い将来の参考になってありがたかった。
・CCAや山室様のお宅訪問での高校生との交流はとても有意義な時間であったから、交流のプログラムは継続すべきだと感じた。
・USCでの大学生との交流が、あくまで個人的な意見だけれど少し距離があると感じたので、いくつかのグループに分けてもよかったんじゃないかと思いました。
・今年から始まったCCAの子達との交流についてで、吉祥寺でせっかく仲良くなれたのに彼らと交流する時間がほぼ取れなかったのはもったいないなと思った。どこでもいいから、半日観光のような、交流できる時間を設けてほしい。
・UCSD、グリフィス天文台、CSC、スクリプス海洋研究所、OB宅への訪問は自分の中でとても魅力的だったので続けてほしい。ただ、UCLAの滞在時間がUCSDと比べるとかなり短かったのでもう少し長い時間滞在したかったのと、CCAも日本語クラス以外の授業も受けてみたかった。あとは研究発表の際に、UCLAではかなり鋭い指摘があったように見えたが、UCSDでは少しそれを感じられなかったのでせっかくアメリカで発表する以上はしっかりディスカッションする場にしてほしかったと思った。
・研究発表が終わった後や訪問の前後で質問したい時が多くありましたが、次にブックストアショッピングがある時などはその時間が押されて次の行程の時間がなくなるとかショッピングが次の日になるとかがあったので、多くのことを吸収したい分、発表の時間とかはもう少し多くとってもいいのではないか

なと思った。
・日本語が話せない方との交流を増やして欲しい。海外の大学進学についての説明は継続して欲しい。
・現地の学生との交流は自分の殻をやぶる良いきっかけになると思うので、継続または増やした方がよいと思う。
・OBである山室さん宅に訪問させていただくというプログラムは今後も続いていくと大変良い刺激になるかなと思いました。今年はありがたいことに同年代の外国人の子たちと交流することができ、私としてはこの研修中で一番楽しく、外国人の子たちと最も密にコミュニケーションができたと感じています。もちろん勉強とは少し離れたジャンルではありましたが、文化が違う人と壁を隔てずラフに仲良くなるというこのかけがえのない経験は、海外への興味をさらに高める貴重なきっかけになると感じました。
・CCAでの滞在時間をもっと増やして、通常授業も受けたかったなと思った。
・今回私はムアーズがんセンターで本当に多くのことを学んだのでそのプログラムは残していって欲しいです。また、CCAでは良い友達ができたのでそれも重要なプログラムだと思います。修正したほうがいいのは特にありませんが、グリフィス天文台で外の景色に時間を使いすぎて内の展示をじっくり見れなかったのが私の後悔ということだけ書いておきます。
・CCAの生徒が立川高校に来て、アメリカに私達が行った時にCCAに行くプログラムを残してほしいです。
全体的にすごく充実していてよかったと思います。California Science Centerで時間があまり取れなかったのでもう少し長く見たかったです。
・海外の高校・大学と交流するイベントはとても重要なので続けてほしいと思った。
自主的にバスの中などでも友達と英語を用いて会話したことで交流の際もスムーズに英語を使うことができたので、それを次の生徒たちにもお勧めしたいと考えた（研修中はオールイングリッシュなど）。
・もう少し現地の高校生と交流できる時間があってもよいと思った。また、研修中一日はどこか一か所だけに滞在する日を作って、より深く知る・考えることができるとよいと思った。

９．保護者の方から今回の海外研修プログラムのご意見やご感想がありましたらお聞かせください。

・アメリカ研修に参加できたことは、本人にとって、一つひとつが本当に貴重な経験になったように思います。
まず、研修のレベルについて行けるかギリギリまで悩み、参加を自己決定したこと。次にパスポート申請や持ち物、発表準備、体調管理全て自分で行ったことは、ミスや段取りよくいかないことも含め、本人にとって今後に大いに活かせることと思います。そして何より研修プログラムの内容の濃さと先生方のサポートの手厚さです。たくさんの企画が組み込まれた内容であり、興味深い場所ばかり。異文化を肌で感じられる雰囲気で、あまり物怖じしなかったようで帰国したくないと思ったようです。やはり、旅行ではなく研修ですね。本人と話しましたが、たくさんの気づきと刺激を得ることができたように思います。保護者としては、毎日の先生からのレポートで「体調不良はない」と書いてあり、写真まで見ることができ、家族で安心することができました。
先生方、また研修を支えて下さった全ての方に感謝いたします。ありがとうございました。
・お世話になりました。他では体験できない充実した研修が行えた様子でした。ありがとうございました。
・アメリカ研修は、息子には初めて海外でした。帰ってきての報告では、全てに驚きがあり楽しかったとのこと、アメリカの大学にも興味を持ったようで、将来への可能性も広がったのではないかと思います。先生からのリアルタイムの近況報告もとても良かったです。体調や食事の様子が分かり、安心しました。子供達の活動や笑顔を写真で毎日見ることができて、親にとっても楽しい１週間でした。本当にありがとうございました。
・研修に参加する事が出来て良かったと本人が言っていると言う事は、アメリカで過ごした一週間が沢山の刺激と得るものがあったのだと思います。また、多くの方の助けや友達とのやりとりを通して大きく成長が見られて親としても参加させて頂けて感謝しております。本当にありがとうございました。
・このたびは貴重な留学の機会をいただき、誠にありがとうございました。娘は現地の方々と触れ合う中

で、さまざまな考え方に触れることができ、視野を大きく広げることができました。また、異文化に直接触れることで、相手の国や文化を理解しようとする気持ちがさらに強くなったように感じております。親としても、この経験を通して娘が大きく成長した姿を見ることができ、留学に参加させて本当に良かったと心から思っております。

・ハードなスケジュール、簡単ではない課題、試される度胸…送り出す側も心配が募りましたが、行程の度に先生から報告と写真を送っていただき、現地での様子が非常によくわかり、安心できました。はじめのほうの写真は不安そうな表情も見られましたが、前向きに交流やプレゼンにチャレンジしている姿や、時間を追うにつれ仲間との交流を深めて、リラックスして一つ一つの行程を楽しんでいる様子が伝わってきました。たいへんな行程のなか、本当にありがとうございました。

・現地研究者の方の英語を理解しながら聞くことができ、たくさんの知識を得られたこと、また、自身のプレゼンへの質問やアドバイスに対して英語で自分なりの合格点でやりとりができたことなど、得難い経験のなかでレベルアップを実感できたようです。英語で話しかけることにためらいがなくなったと話していました。

・万事のスケールの大きさや、アメリカの人（人種問わず）のポジティブさ・明るい振舞いに圧倒され、普段自分がいる世界とは違う、大きな視点に気づくことができた、これまでの世界観が大きく変わったと話してくれました。これから自分の意思でさまざまな選択を重ねていく大事な時期に、経験に基づいた新たな視点を加えることができ、本当に良かったと思います。

・自分の興味のある分野に近い、現地研究者の方に具体的な進路の考え方などアドバイスをいただくことができ、大変有意義だったとのことです。化学物質や薬の研究に興味があるものの学部を絞りかねているという本人の悩みに対して、ご自身の経験やご友人の進路選択などを交えながら、どの視点からアプローチしたいかを一緒に探ってくださり指針となるアドバイスをいただけたと喜んでいました。

・普段学校で仲良く過ごしているメンバーは今回の研修に参加していなかったことから、一週間心細い思いをしないか、出発前まで実は大きな不安だったそうです。振り返ってみれば、事前にもう少し、自分自身の課題として学内で積極的に交流を図るなどすることで、スタート時点の不安をもう少し和らげられていたのかもしれません。とはいえ、共に体当たりで臨んだ研修では時間とともに親睦も深まり、楽しい時間を共有できてニコニコの笑顔で帰ってきてくれました。心優しく前向きな立高生に感謝です。

・アメリカ研修では、大変貴重な経験をさせていただきありがとうございました。帰国後は、疲労からか口数が少なく感じましたがそんな中でも「友達たくさんできた。理系もいいなって視野が広がった」との言葉がありました。自分の将来について深く考える良い機会だったのではと感じました。また、滞在中の大澤先生からのお知らせと写真を毎日楽しみにしておりました！子供たちの様子が伝わってとても安心しました。ありがとうございました。

・事前の勉強会や、交流、説明会などの場も充分にあり、これは本人の意欲にもつながり大変意義のある事だと思いました。課題研究がなかなか思うように進まずプレッシャーに感じていたようでしたがなんとかやり遂げ安心しました。研修旅行で楽しむばかりでなく、試練も乗り越え頑張ったと思います。行く直前はかなり不安になったようでしたが、飛行機に乗った途端？友達と話すなどして期待で一杯になったようです。滞在中本人からの連絡はあまりなかったのですが、先生からのメールで皆の様子を詳しく知る事ができ、写真も沢山添付していただきとてもありがたかったです。充実した研修内容で大変貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

・引率の先生方はもちろん、事前学習や準備段階から関わってくださった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。今後の進路を考えるこのタイミングで、海外の大学や研究機関を訪問し、また同世代の学生と直接コミュニケーションをはかれる機会を得たことは非常に意義深いと思います。また、探究発表も、自分の探究テーマについて英語翻訳からはじまり資料を仕上げ、英語で発表し質疑応答・講評をいただく、というこの一連をやりきったことはとても大きな自信になったように思います。誇らしげに報告してくれる様子は普段あまり見ることがない姿で、とても嬉しく受け止めました。実際に渡米し、その場に身を置かなければわからないことがあると思います。食事・現地通貨による買い物などの生活全般、人々の気質、気候、スケールの違い等々、また外から日本をみることで気づいたこともあっ

たと思います。目に見えて何が変わった、成長した、ということはないかもしれませんが、一歩踏み出してアメリカ研修に応募し、全行程をやり遂げたこの経験は、今後、娘に折にふれて力を与えてくれるものと思います。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

・８日間大変お世話になりました。入学前から希望していた海外研修だったので参加することができて良かったです。充実した顔で帰国してきて、得るものがたくさんあったのだと思います。内容の濃いスケジュールで多くの経験をさせていただき、これからの成長がまた楽しみになりました。参加した全員が無事に研修を終えられて無事に帰国できて良かったですが、１人直前で参加できなかった生徒がいたことを後から聞き残念に思いました。来年はそのようなことがないと良いです。帯同していただいた先生方、添乗員さん、ありがとうございました。

・今回は参加させていただき、本当にありがとうございました。出発から帰国までClassiで状況を詳細に説明していただき、常に安心して過ごせました。初めて海外、立高の皆さんと行くことが出来て本当によかったと思っています。子供は言葉では言い表せない程あらゆる面で成長して帰ってまいりました。英語が苦手でしたが、アメリカ行く前の研修含め沢山勉強させていただき、感謝しています。現地ではあまり英語は話せなかったみたいですが、友達が沢山出来たと喜んでいました。今後、今回の研修を活かして自分の目標に向かって頑張ってもらえたらと思っています。本当にありがとうございました。

・今回は海外研修への準備から引率、大変お世話になりました。まず、研修会の日程を拝見し、とても充実したプログラム、一流の機関での研修ばかりで驚きました。このような海外研修会を計画するにあたり、ご尽力いただき大変感謝いたします。毎日の一つひとつの研修がきっと子どもたちにたくさんの刺激を与えてくれたことと思います。ひと回り成長して帰国したように感じます。また海外研修会中にたくさんの写真も送っていただき、研修会の様子を垣間見ることもできました。（息子は全く写真など送ってこないので）毎日の報告を楽しみにしていました。今回の体験は間違いなく彼のこれからの人生において良い影響をもたらしてくれると思います。今後の文化祭での海外研修報告など楽しみにしています。引率してくださった大澤先生、森崎先生本当にありがとうございました。そしてこのような海外研修会を開催できるよう尽力してくださったすべての方々に感謝申し上げます。

・今回のアメリカ研修では本当にお世話になり有難うございました。申し込み当初は不安で一杯だった様ですが、準備期間のご指導や保護者も含めた丁寧な説明のおかげで、研修に向けて気持ちの上でも実務的にもしっかりと準備が進んでいることを感じておりました。また実際に参加した中では、本当に充実した他では絶対経験のできないプログラムの連続で、参加した誰もが大きく成長するきっかけになったことと思います。本日（帰国翌日８/25）も朝からUCLAの研究者の方（現地で連絡先をお聞きしてきた様です）に学部の選び方についての進路相談の様なメールをしたところ早々にとても詳しい返信をいただき、先週までは想像もできない様な様子を目にして驚いております。今回の８日間は日頃から自主自立の忙しさに慣れた立高生ならではのスケジュールだった様にも思いますが、引率された先生方のご苦労様は計り知れないところです。日々のClassiでのフィードバックもとても楽しく拝見しておりました。本当に充実した研修を運営いただき心より感謝申し上げます。お世話になり有難うございました。

・空港からの帰路時も興奮気味にいろいろな話しを聞かせてくれました。旅行ではできないたくさんの経験やお話を伺う事ができ、将来に対する考え方も変わったようです。大変貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。意見が２つございます。一つ目は、ESTA申請不備？で参加できなくなった子がいたと聞きました。こういった事が今後ないようお願いしたいです。２つ目は、保護者向けのアドバイスもあった方が、準備等する際助かると思いました。

・この度は、アメリカ研修に参加させていただき、ありがとうございました。課題への取り組みをはじため、事前準備や現地での注意事項など、丁寧にご指導いただき、初めての海外での１週間も安心して過ごすことができだと思います。出発前は親も子も不安がありましたが、本人の研修に対する熱意と先生方や現地の方々のサポートのおかげで日程を立派にやり遂げることができ、貴重な経験と思い出を得ることができたようです。また、日々更新されるClassiでは、写真付きで現地での様子を伝えてくださり、保護者として大きな安心につながりました。帰国時の笑顔からも充実した研修であったことが伝わり、安堵したと同時にとても頼もしく感じました。

今回の経験を今後に生かしてくれることを願っています。ありがとうございました。（次回に繋げて欲しい意見として）当初は班を適当に決めたとのことで女子１人の班でしたが、申し入れをして男女比を均等に組みなおしを依頼したという経緯がありました。実際、現地では班での行動が思いの外、多かった様なので、やはり今後も男女の人数比は考えて班を決めた方が良いかと思いました。

・このたびは、大澤先生・森崎先生、近畿日本ツーリストの添乗員の森様をはじめ、多くの方々の多大なご尽力で、素晴らしく充実した海外研修が滞りなく終えられたことに、まずもって深く御礼申し上げます。大澤先生からは毎日頻繁にメッセージと写真をお送りいただき、生徒たちの元気な様子を見て安心できておりました。１週間の行程の中に、実に多様な予定が組まれていることに改めて驚きました。この企画や運営にはどれほど先生方のたいへんなご苦労があったことかとお察しします。子どもが帰宅後、得意げに土産話を披露していましたが、１週間の研修で確かに得るものがあったのだなと感じ、親として嬉しく思っています。今後もレポートや報告会などが予定されているとうかがっていますが、引き続きご指導のほどよろしくお願いいたします。本当に有難うございました。

・息子はアメリカ研修に参加したくて立高を受験しました。念願叶って参加させていただけましたことに本人家族一同深く感謝しております。事前学習から現地プログラムまで非常に充実しており、なるべく生徒に主体性を持たせるような働きかけや工夫にも敬服しております。立高のアメリカ研修は、奇跡のようだと感じます。これまでのアメリカ研修の実績の積み上げ、先生方の年々の改良とご尽力、各方面で活躍されるOBOGの皆様、ご紫芳会荒井様のご支援、そして意欲的な同級生の皆さん、本当に奇跡のような素晴らしい研修に参加させていただきました。この後も、研修の一環として、振り返りやまとめ、校内校外の皆さまへの発信・還元が大事ですので、親からも見守りつつそれらの大事さを伝えてまいります。アメリカ研修は、本人にとってすぐ役に立つことだけではない、大切な種まきになったと思います（と期待します）。今後の人生で、折に触れて考えたり、皆さまへの感謝の心を思い出したりしながら、糧にしてもらいたいと思います。先生方皆さま、本当にありがとうございます。

・高校生という若い時期に貴重な経験をさせていただき、大変ありがとうございます。娘のこれからの人生において大変影響のある研修であったと思います。研修や日常の生活についての内容を毎日写真や文章で伝えていただき、こちらも楽しく拝見させていただきました。先生方も多くの気遣いや心遣いをされたかと思います。どうぞゆっくり休んでください。

・先生方本当にありがとうございました！今回、息子は全っっっっくLINEをくれなかったし既読も付かなかったので（←なぜ？）大澤先生からの毎日の写真とレポートだけが楽しみでした。不安と心配ばかりして待っていましたが、大澤先生のおかげでアメリカでの様子が良く分かり、本当に本当に助かりました。心から感謝しています。ありがとうございました！息子が帰宅してから色々聞くのが楽しみです。

・英語が苦手で当初は申し込みを躊躇していましたが、選考では英語力だけではなく総合的に判断してくださてようでありがたかったです。事前に研修をしてくださったおかげで、渡航するまでには少しは英語への苦手意識が薄れたようで、それだけでもよかったと思いました。保護者会も開催してくださり、１回目の保護者会で持ち物や手続きなどを早めに確認できたのが心の準備ができて助かりました。渡航前から帰国まで、お忙しい中こまめにclassiで連絡や現地での様子の報告を写真や文章でしてくださり、状況が分かり安心できました。個人旅行ではなかなかいけない場所に行き、なかなか会えない方々に会い、大変貴重な経験をさせていただいたと感謝しております。それらを全てアレンジするのはとても大変だったと思います。どうもありがとうございました。研修参加前にいくつかの大学のオープンキャンパスに参加していたのですが、帰国後、子供の話を聞くと日本と米国の大学の研究環境の違いなどを感じたようです。将来的に海外で勉強することも選択肢のひとつとなったようです。視野が広がったと感じます。海外経験は早いうちにした方がよいと考えていましたので、今回このような機会をいただけて先生方や援助してくださった荒井様にとても感謝しております。どうもありがとうございました。

・８日間、大変お世話になり、ありがとうございました。本人が高校入学前より目標の一つにしておりました、このアメリカ研修に参加でき、親子共々嬉しく思っております。私達の想像や期待をはるかに超え、本人は最大限に学び楽しんで、大きく成長して帰国しました。他にはない、立高ならではの濃密で素晴らしい研修プログラムでした。語学の学習や、英語で発表することにとどまらず、現地の研究者や

学生との会話や、質問、意見交換等できたことで、更に自身を成長させることができたと思います。立高生同士の絆、また現地での数多くの方々との出会い一つとっても、今後に繋がる一生の宝物となりました。大澤先生、大変ご多忙の中、たくさんの写真とともに何度も様子をお伝えくださり、本当にありがとうございました。この嬉しいほどの過密なスケジュールを最後まで思う存分に楽しめたのは、本人の事前準備もそうですが、なにより先生方や支えてくださった方々あってこそだと、心から感謝の気持ちでいっぱいです。貴重な本物体験を本当ありがとうございました。

・この度のアメリカ研修では大変貴重な経験をさせていただきました。今回が初めての海外ということもあり多少案じておりましたが、Classiを通じて、現地の様子や子どもたちの体調・表情などを共有してくださったことで、親として安心して見守ることができました。このようなきめ細やかなご配慮に心より感謝申し上げます。現地の研究者の先生方・学生の皆さんとの交流することによって、息子が視野を広げ、自分の将来についても真剣に考えるきっかけとなったことは何よりの成果だと感じています。このような素晴らしい機会を企画・運営してくださった先生方や関係者の皆さま、そして渡航費の一部をご支援くださいました荒井様に、改めて心より感謝申し上げます。

・学校の宿泊行事以外で、親と離れて外泊はしたことがなく初海外、英語の成績もGTECもあまり良くない我が子がアメリカ研修に行くことは不安でした。本人は忙しい学校生活の中、アメリカ研修の事前学習や準備を頑張ってきました。渡航中も親としては体調崩してないか？ちゃんと会話できているか？不安でしたが、本人やClassiで送っていただいた写真で滞在中の様子を伺うことができました。帰国してから『行って良かった』と、研修中のことだけでなくこれからの展望についても話してくれるのを見て我が子の成長を感じることができました。

親としても研修までの準備は決して楽ではなかったのですが、笑顔で話す我が子の姿を見て、アメリカ研修に参加できて良かったと思います。ありがとうございました。

・アメリカ研修への参加が決まってからは発表の準備を頑張っていました。出発の５日前くらいから毎日家族の前で発表し、家族から気付いた点などを伝え改善していました。最初のうちは照れた様子もありましたが繰り返すうちに真剣に取り組んで、兄のアドバイスを受けながら原稿を練り直したりもしていました。家族にとっても良い経験、思い出になりました。本番の発表では専門的な内容が思うほど伝わらなかった、と言っていましたがそれも得難い経験だったのではと思います。毎日色々なところを訪れ、その大きさや設備の充実、学生へのサポートなど、日本との違いも実感したようです。実際に目で見て肌で感じ、インターネットだけでは得られない気付きを得て、将来この研修が意味のあるものになってくれたら、親として嬉しく思います。先生方には生徒の安全を守りながら充実した研修をご準備いただき、また深夜まで日々の様子をまとめてお知らせいただき、本当に感謝しております。毎日classiをチェックするのがとても楽しみでした。ありがとうございました。

・たくさんのイベントが盛り込まれていてとても有意義で貴重な経験になったと思います。毎日の夜にその日のまとめを行う時間を入れてもらうとよりよい研修になると思います。

《分析と考察》

【設問２から５について】

・参加した生徒全員が「とても思う」「思う」「少し思う」と回答しており、今年度は大変充実した研修になったといえる。特に「とても思う」と回答した生徒の割合が非常に高く、国際感覚の高まりや将来の進路に対する意識の向上に大きく寄与したと考えられる。SSHの取り組みの柱の一つであり、当研修のねらいでもある「国際性の育成」は達成されたといえる。

【設問６について】

・「とてもなった」と回答した生徒が80％を占め、今回の研修により、海外で活躍もしくは勉強・研究したいという気持ちが大変強まったことがわかる。当研修の「将来、国際社会で積極的に社会貢献していく科学技術人材としての芽を育てる」という目的は、十分に達成されたといえる。

引率教員より

今回のアメリカ研修では、現地で活躍されている多くの日本人研究者の方々や、卒業生である山室様から貴重なお話を伺うことができました。生徒たちは、失敗を恐れずに勇気を持って一歩踏み出すことの重要性を学び、大きな刺激を受けたようです。特に印象深かったのは、Caltech（カリフォルニア工科大学）の若き日本人研究員の方が、「Get out of your comfort zone」という力強いメッセージを残してくださいました。これは、自分が安心できる領域や慣れた環境を離れ、新しいことに果敢に挑戦する姿勢の大切さを示す言葉です。

また、CCAをはじめとする現地の高校生や大学生との交流では、積極的に英語で会話を楽しみ、友情を深める姿が印象的でした。連絡先を交換するなど、国境を越えたつながりを築く様子に、国際的な視野の広がりを感じました。

英語による研究発表では、構成のしっかりしたスライドを用い、原稿に頼らず堂々と発表する姿が見られました。研究内容の質の高さも際立っており、講評をいただいた研究員の先生方からも高い評価を受けました。特に、英語での質疑応答において、相手に伝わるよう工夫しながら答える姿勢は、非常に素晴らしいものでした。

最後に、校内の先生方をはじめ、荒井財団、本校の同窓会組織である紫芳会、国立研究開発法人「科学技術振興機構（JST）」、そして保護者の皆様の温かいご支援と深い愛情に心より感謝申し上げます。生徒たちがこの経験を糧に、新たなイノベーションを創出し、国際社会で活躍できる人材へと成長していくことを心から期待しています。

（２学年担任 数学科　森崎　真由美）

令和元年にスタートした「SSHアメリカ合衆国海外研修」は、コロナ禍のために中止していましたが、令和５年に再開し、今年度は４回目として無事に実施することができました。本研修はフィールドワークや研究者・学生との交流などの視野を広げる様々な取組によって、将来、創造性豊かに新たな価値を生み出し、国際社会で積極的に社会貢献していく科学技術人材を育成することを目的としています。

世界最先端の各研究機関、学校施設を訪れ、現地で活躍されている日本人研究者、現地の大学院生や学生と交流することは、生徒たちの将来の進路決定や人生設計において、大きな影響を与えるものと思われます。また、本校ＯＢの方々が現地で活躍されている姿を目の当たりにし、こうして研修の場で出会えたことで、人と人とのつながりがいかに大切であるかを実感したのではないでしょうか。

私は若い時の海外経験は非常に重要であると考えています。「井の中の蛙」という言葉通り、日本でいつもと同じ仲間とだけで過ごしていると、限られた世界や知識にとらわれて、どうしても視野が狭くなってしまいがちです。もちろん保護者の方のご協力やご理解なしには参加できませんが、高校２年生で海外研修に挑戦するという選択はそうそうできることではありませんし、ましてや親元を離れて一週間異国の地で研修する機会に恵まれることなど普通ないことです。新たなことに挑戦する一歩を踏み出した彼らは本当に立派だと思います。

今回本研修に参加したことで、英語はコミュニケーションツールの一つであり、伝えたいことを伝えようとする「思い」が一番大事であることにも気が付いたはずです。学校英語では高い語彙の知識や完璧な文法が求められますが、実際のコミュニケーションでは、その必要性は低く、むしろ、話そうとする積極性と身振り手振り、表情、伝えたいという思いを前面に出すことで伝わることを痛感したことと思います。こうしたことを含む様々なアメリカでの経験が今後どのように彼らの成長につながるのか。その姿を見るのが本当に楽しみでなりません。

（探究部担当　大澤　裕一）





成田空港　集合の様子


成田空港　出発前に集合写真


保護者の方に見守られながら出発



ロサンゼルス到着前（機内にて）


ロサンゼルス到着前（機窓より）



ロサンゼルス空港到着①



ロサンゼルス空港到着②



UCSD学生とともにサンディエゴ市内エコリサーチ



サンディエゴ・シーポートビレッジにて①



サンディエゴ・シーポートビレッジにて②


UCSD到着



UCSD学生寮入寮の様子


学生寮の一室



UCSD学生とカフェテリアでディナー①



UCSD学生とカフェテリアでディナー②



UCSD学生とカフェテリアでディナー③



UCSD学生とカフェテリアでディナー④



UCSD学生とカフェテリアでディナー⑤



キャンパス内スーパー「ターゲット」

2日目



カフェテリアでの朝食①



カフェテリアでの朝食②



カフェテリアでの朝食③



カフェテリアでの朝食④



バスに乗りこむ様子



スクリプス海洋研究所所有の桟橋で集合写真①



スクリプス海洋研究所所有の桟橋で集合写真②



研修の様子①



研修の様子②



研修の様子③



研修の様子④



ラ・ホヤコーヴにて①



研修の様子⑤



ラ・ホヤコーヴにて②



ラ・ホヤコーヴにて③



ベトナム風サンドイッチのランチ①



ベトナム風サンドイッチのランチ②



ラ・ホヤコーヴにて集合写真



UCSDでの研究発表①



UCSDでの研究発表②



UCSDでの研究発表③



UCSD研究員の方々を囲んで



自由時間でバスケ



カフェテリアでのディナー①



カフェテリアでのディナー②



カフェテリアでのディナー③



カフェテリアでの朝食①



カフェテリアでの朝食②



バスに乗りこみ出発



Canyon Crest Academy（CCA）到着



CCAにて現地学生と交流①



CCAにて現地学生と交流②



CCAにて現地学生と交流③



CCAにて現地学生と交流④



現地学生とランチ



CCAの体育館



立川市を紹介する北村くん



みんなで集合写真



ムーアズガンセンター到着



林先生による特別講義


日本人研究員によるラボツアー①


研究員の先生方へ御礼の言葉


日本人研究員によるラボツアー②


研究員の先生方と集合写真



日本人研究員によるラボツアー③


ムーアズガンセンター施設を前に集合写真


カフェテリアでのディナー①


カフェテリアでのディナー②


カフェテリアでのディナー③


ジェンガが成功し大はしゃぎの男子たち



カフェテリアでの朝食①



カフェテリアでの朝食②



UCSDキャンパス内を移動



日本人研究員の方の自己紹介



UCSDにて研究発表①



UCSDにて研究発表②



UCSDにて研究発表③

4日目



UCSD研究員の先生方を囲んで



カフェテリアでのランチ



UCSDブックストアでショッピング



広大なキャンパス内を歩いて移動



寮をチェックアウトしバスで移動



山室様のお宅に到着



山室様宅で現地学生と交流①



山室様宅で現地学生と交流②



山室様宅で現地学生と交流③



みんなでサンドイッチづくり



奥様のBethさんと話す生徒たち



用意していただいたアメリカのおかし



現地学生とプールで交流①



現地学生とプールで交流②



山室様とBethさんを囲んで



現地人気スーパーTrader Joe's に立ち寄り



宿泊するホテルにチェックイン



ホテルにて朝食①



ホテルにて朝食②



ホテルにて朝食③



UCLAに到着し、キャンパス内を移動



UCLA研究員の先生方と集合写真



北郷先生による講義



UCLAにて研究発表の様子①



UCLAにて研究発表の様子②



研究員の先生を囲んでのランチ①



研究員の先生を囲んでのランチ②



研究員の先生を囲んでのランチ③



キャンパス内のフードコート「パンダエクスプレス」にて



キャンパス内のブックストア



広大なUCLAキャンパスを歩く


グリフィス天文台にて集合写真


グリフィス天文台からの景色①（ハリウッドサイン）


グリフィス天文台からの景色②（LAダウンタウン）


グリフィス天文台館内の様子①



グリフィス天文台館内の様子②



グリフィス天文台館内の様子③


SKYUSの佐藤さんを囲んで


ホテルにてディナー①


ホテルにてディナー②


ホテルにてディナー③


ホテルにてディナー④



ホテルにて朝食①



ホテルにて朝食②



ホテルにて朝食③



バスに乗りこみホテルを出発



カリフォルニア工科大学（Caltech）にて研究員の学生さんを囲んで



Caltech日本人研究員による特別講話①



Caltech日本人研究員による特別講話②



研究員の方を囲んでのランチ①



研究員の方を囲んでのランチ②



研究員の方を囲んでのランチ③



南カリフォルニア大学（USC）に到着



本校OG片田先生による特別授業



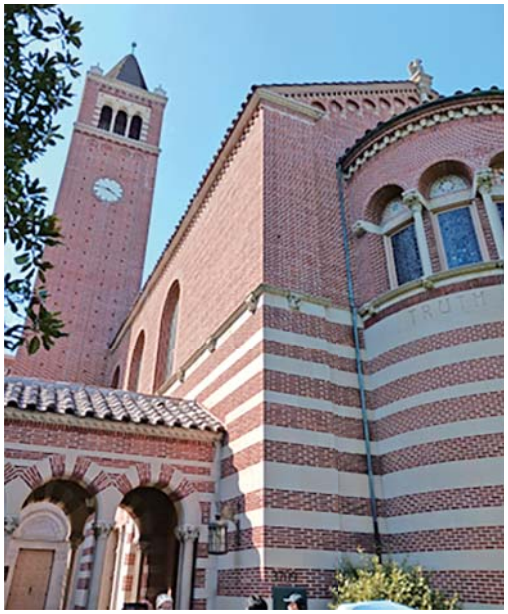
現地学生との交流の様子



キャンパス内ブックストアに立ち寄り



USCキャンパス入口にて



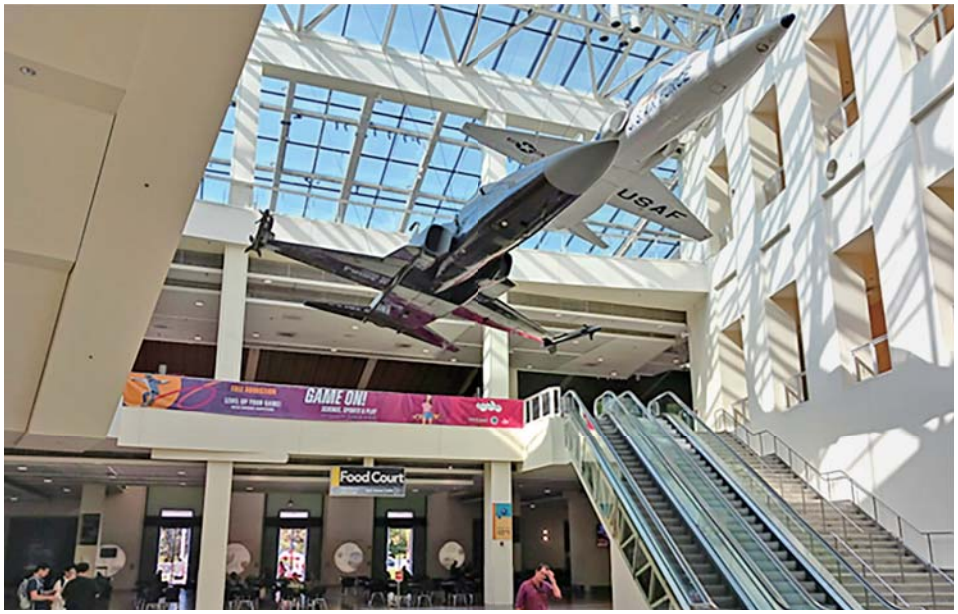
USCキャンパス内の建物



片田先生と一緒に集合写真



カリフォルニアサイエンスセンター（CSC）到着



CSCエントランスにて



CSCにて　宇宙服の展示も



ハリケーン体験中の生徒たち


CSC展示を見る生徒たち


CSC出口にて


ホテルでのディナーを前に学んだことを発表する武田くん


SKYUSのYuuさんを囲んで


ディナー後のゲームの様子


ホテルでのディナー①


ホテルでのディナー②


ホテルでのディナー③


ホテルでのディナー④



ホテルにて朝食①


ホテルにて朝食②


ホテルにて朝食③



ロサンゼルス空港到着①



ロサンゼルス空港到着②



ANAチェックインカウンターにて



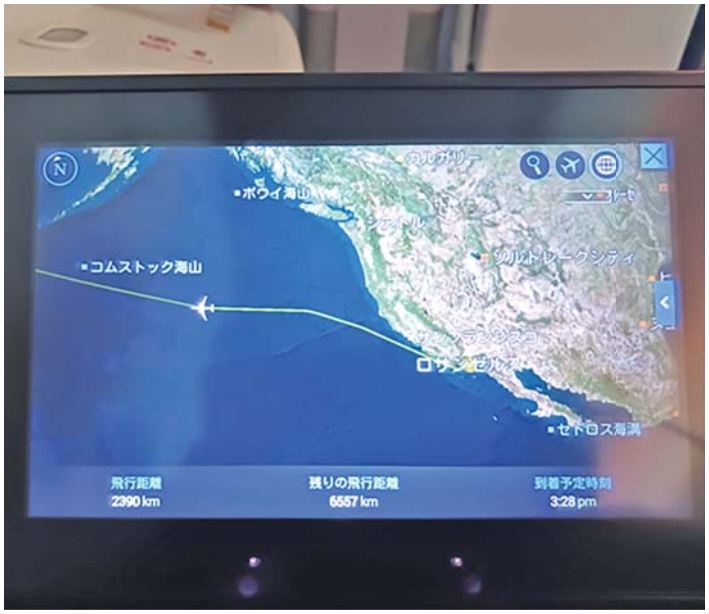
成田行の案内板



搭乗を待つ生徒たち



搭乗機



ロサンゼルスから成田に向かって飛行中



機内食



成田空港到着



添乗員の森さんにごあいさつ

(財)荒井財団

『令和７年度ＳＳＨアメリカ合衆国海外研修』は一般財団法人荒井財団（代表 第10回卒業生　荒井喜八郎 氏）からご支援をいただいて実施しています。

令和７年度
SSHアメリカ合衆国海外研修 成果報告書

令和７年10月１日発行

発行者　**東京都立立川高等学校**
〒190-0022
東京都立川市錦町２丁目13番５号
電話 042-524-8195
FAX 042-527-9906
URL https://www.metro.ed.jp/tachikawa-h/

VEGETABLE OIL INK
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。


Gates 150-159
Hudson


American
STOP